

日本人キリスト者三浦襄の「南方関与」

—信徒のキリスト教受容に関する一考察*—

原

誠**

Jo Miura, A Japanese Christian Who “Moved Southward”

—An Attempt at an Analysis of the Acceptance of Christianity
among Ordinary People—

Makoto HARA

Christianity in Japan was accepted not only by some intellectuals but by a large number of ordinary people, who played a significant role in the life of the church. An analysis of the acceptance of the Christian faith by these people is very important in the study of the history of the Japanese church. In this thesis the author attempts such an analysis. It is a case study of Jo Miura, who, during the time of the modernization and military aggression of Japan, lived most of his life in Indonesia after moving Southward (Nanshin), cooperating with the Japanese military occupation in the Second World War, recognizing the validity of the independence movement in Indonesia and finally taking his own life immediately after the war.

Miura was born the son of a Christian pastor. After dropping out of Meiji Gakuin, he joined Nanyo Shokai, an export firm, and traveled to the Dutch East Indies, now Indonesia. He eventually settled on the island of Bali, winning the trust of the local people. During the war he cooperated with the Japanese military occupation as a civilian but at the same time strongly identified himself with the independence movement in Indonesia. The day of his death, September 7, 1945, was the day scheduled for independence. The thesis follows the story of his life, focusing on his philosophy of life and the meaning of Christianity for him.

* 本論文はもと1978年1月に同志社大学大学院神学研究科に修士学位論文として提出したものである。その後、矢野暢「堤林数衛の精神的「回心」——「南方関与」の近代的類型——」（『東南アジア研究』15巻3号, 1977年12月）の刊行とともに三浦襄に関するいくつかの新たな史実が明らかにされた。本稿は、それらの諸点をさらにつけ加えて脱稿したものであるが、その他は修士論文のままである。

本稿が成るにあたっては多くの人々の御助力を頂いた。

先ず本論文は、ケーススタディとして、いわば無名の人間を掘り起こすという性格上、資料収集に力を注いだ。そのため筆者は、秋田、新庄、仙台、東京、横浜、京都、姫路、広島で一次資料の発掘およびインタビューを行ない、三浦襄の遺族、元南洋商会員大場条太郎、元三井農林社員藤岡保夫、植村環、福島正雄、鈴木太郎の各氏を訪問し、こころよく昔の話を伺うことができ、貴重な資料の提供を受けた。三浦の遺族宅では、最後に残された三浦の形見ともいふべき「日記」を借用することができた。

また東北学院大学図書館から、日本基督教会宮城中会に関する資料、日本基督教会秋田教会からは所蔵の資料、明治学院史料編纂室から『白金学報』その他、早稲田大学社会科学研究所ではインドネシアの日本軍政に関する資料（いわゆる西嶋コレクション）の閲覧および複写に関して便宜を図っていた。

I 日本におけるキリスト教受容の研究手法

一方法論的課題一

I-1. 従来の研究方法

明治以来の近代日本社会においてキリスト教が、日本という精神土壌にどのように関わったのか、あるいは関わりえたのかという、いわゆる「土着化」の問題は、一貫してわれわれの基底的かつ現在の課題である。具体的な伝道論、宣教論の立場に立って研究する場合でも、その前提として、単なる欧米神学の移入の問題としてではなく、この「土着化」の問題を見据えたところで論ずるべきである。

この「土着化」という課題をめぐる研究は、従来大別して二つの方法論で行なわれてきた。一つは社会経済史的方法論であり、他の一つは、思想家のキリスト教との関わりを個別的に考察し、その特質を抽出するという思想史的方法論であった。

隅谷三喜男によって開始された社会経済史的方法論は、教会の成立過程を検証し、明治期の政治的経済的構造の変動と、それにともなう国民の意識の流動化に着目することによって、これらの社会経済的諸関係がキリスト教受容にどのような要因を与えたのかを実証的に明らかにするものである。¹⁾ 社会経済史的方法とは、隅谷によれば、第一に「教会」の存在様式をたんに「聖なる教会」として捉えるだけではなく、歴史的・社会的な制約性においても捉えること

いた。記して心からの謝意を表したい。

早稲田大学社会科学研究所の増田与、後藤乾一、京都大学東南アジア研究センターの矢野暢、土屋健治の各氏からは、暖かい励ましと御教示を得た。とくに矢野暢氏からは、堤林数衛に関する一次資料を使用させて頂き、土屋健治氏には、インドネシア語の文献について御教示いただいた。また矢野氏からは矢野氏主宰の「日本の南方関与と文化摩擦」(文部省特定研究)研究会において中間報告の機会を与えられて、南進論や研究方法について示唆を受けることができた。さらにまた、本論文を発表する機会を与えていただいた。同志社大学大学院では、土肥昭夫氏の厳しくも暖かい御指導を受けた。

以上の方々の御助力なしには本論文は完成しなかったであろう。心からの謝意を表する。しかし、いうまでもなく本稿の最終的責任は筆者自身にある。

三浦襄は筆者の父方の祖母のすぐ上の兄、すなわち大伯父にあたる。その意味で、筆者と三浦は血縁関係である。しかし、筆者は本論文執筆に際し、そのような私情を排し、歴史的に位置づけようと試みた。

筆者の本論文の執筆目的は本論に述べたが、その動機は、三浦を通して筆者自身の「キリスト教」受容を考察したいということであった。筆者は、三浦の場合とは異なり、筆者自身の実態的分析方法に従えば、(II)の(3)の(a)である。その意味で、三浦とは対極的位置にあるかもしれない。いずれにせよ本稿によって三浦というひとりの無名の日本人が歴史の中にいささかなりともよみがえりうるならば、筆者のよろこびこれにすぐるものはない。

** 同志社大学大学院神学研究科

- 1) 隅谷三喜男は、『近代日本の形成とキリスト教』(新教出版社、昭和46年)の中で、明治期キリスト者の特質として、(1) 明治日本の建設と信仰とが不可分であったこと、(2) 人格の発見による新しい倫理主義、ピューリタニズムが儒教と結合したこと、さらに(3) 共同体的制約が比較的弱い中上層がキリスト教を受容したと述べ、日本のキリスト教会の特質を明らかにした。この方法論を継承し、さらに発展させてきたのが工藤英一、森岡清美である。工藤は社会経済史的方法を、また森岡はそれに家族社会学的視点をも加えて研究を進めた。

によって「教会」を二重性をもった存在として規定することである。第二に、福音を「倫理」の面から受容した日本の教会の歴史を分析するために、そのような教会の歴史を「倫理」の側面から考察することである。第三に、教会の構成員に着目し、いかなる人々がいかなる問題をもって教会に集まり、信徒集団を構成したのか、という視点で考察することであり、先に述べた「倫理」も、この信徒集団の行動様式との関連において理解することである。²⁾

隈谷のこの方法は、日本キリスト教史の分析に社会科学的方法論を導入することによって、その歴史的な実態を明らかにしたという点においていうまでもなく画期的であり、その意味において彼の業績は高く評価されるべきである。しかしながら、彼の方法論からだけでは、依然として明らかにされえない重要な課題がなお残されている。それは彼の方法論が、キリスト教を受容した人々の客体的分析を重視した結果、信徒は一定の歴史的状況下における社会経済的諸関係から、いわば量的に分析され、したがって、ひとつの類概念としてその傾向性が示されるというに留まるという点と関連してくる。

第一に、一定の社会的経済的条件が成立すれば、ひとは必ずキリスト教に入信するようになるという因果関係は存在しない。

第二に、日本のキリスト教は、宣教師によって伝えられ、初期の入信者はそれぞれ指導者となり、宣教師とこれら指導者によって信徒が生まれ、教会が形成されるという回路が成立していたにせよ、だからといって、彼ら指導者の信仰や神学が、信徒のキリスト教の受容とその内実を集約しているとはかならずしもいいがたい。それは、指導者が、キリスト教の内側から異教社会である日本社会を伝道対象として見る視角を持つのに対し、信徒は、その具体的日常生活の局面において、この日本という「異教社会」での内部における人間関係、社会関係および経済関係に、まず何よりも規定されているからである。もちろん、指導者である牧師らがこれら社会的環境によって規定されていないわけではないが、日本社会に対する対応の仕方が、信徒とは質的に異なる側面があることを見落とすことはできない。

そしてまたわれわれは、信徒がキリスト教に出合い、その内発的契機を経て歴史的社会的な状況から一つの選択を行ない、この選択によって自らの歴史的社会的状況を主体的に規定してゆくというこの選択と、その結果生ずる状況の規定化を倫理として考える。倫理は、個人に内面的緊張関係を生じさせる契機であり、次に、個人の主体的選択における動機であり、さらにその結果個人が身に引き受けなければなくなるある状況、換言すれば、その結果新たに生ずる緊張関係を個人の内面にもたらす契機でもある。したがって、隈谷が「教会史を、倫理を媒介にして考察することは、福音を倫理の面から受容した日本の教会の歴史を分析する」のに「妥当な方法」であるといい、また「倫理もこの信徒集団の行動様式として理解すべき」であ

2) 隅谷「日本キリスト教史の再検討—新たな展開のために」『福音と世界』1977年8月号, p. 5.

るというとき,³⁾ それは、信仰の事柄としてそこに起こる価値観の変化、ないし逆転という性質の順序を、逆の順序で考察することになるのである。隈谷のこの社会経済史的方法は、したがって隅谷自ら指摘しているように⁴⁾ 限界がある。それ故にわれわれは、信仰が個人として主体的決断を必要とする事柄であり、価値観の転換を促すものであるという視点、いいかえれば、隅谷の方法論では捉えきれない問題性を、あらためてわれわれ自身の課題とする必要に迫られるのである。

第二の方法論は、個人の思想家の思想史的研究を課題とする思想史的立場である。主に武田清子によってなされてきた個人研究は、特定の指導者に関する個別的な思想研究であった。それには理由がある。第一に、具体的な著作があり、彼の思想、信仰、神学を研究することが容易であったこと、第二に、日本の教会の形成は、これら指導的立場にいた思想家のパーソナリティによるところが大きかったことである。

武田清子は、「土着化」という概念を、日本においてキリスト教が人口の majority となること、あるいは日本の教会が人的、経済的に自立する等のことを表現するものではなく、「福音」が日本人の精神的土壌に根をおろすこと、日本人の精神構造の内心部に浸透し、そのパン種的、内発的革新力となって、精神構造を内側から新しくしてゆく価値観、エネルギー、生命力となることであるとした。⁵⁾ そして武田によるキリスト教受容の分析は、埋没型、孤立型、対決型、接木あるいは土着型、そして背教型という五つの類型を立て、それにもとづいて幾人かの思想家をケーススタディとして分析しようとする方法であった。⁶⁾ 武田は、いわゆる二流、三流と見なされる人たち、人びとの間にポピュラーであることのゆえに時としては軽蔑されることさえあっても、多くの人びとの心に内在する思いやねがいを代表し、また多くの人びとに浸透し、それを動かす力となるようなタイプの思想家（群）ないしは思潮をあえて発掘した。彼らは、キリスト教会から見る時、危険を冒す人間、自覚的に戦場にとび出していった民兵であり、野戦部隊であり、本陣が彼らの問題意識に関心を示さず、指導も援助も与えずに黙していても、彼らは日本人として、日本の人びとの問題を負い、己が使命を果たしぬこうとして孤独の戦いを戦ったところの、思想し、行動する人たちであった。⁷⁾

このように、「土着化」の問題を真正面から取りあげてきた業績は高く評価されねばならない。しかしながら、具体的にケーススタディとして取り上げられた人びとが、一定の指導者ばかりであるという不徹底さはまぬかれない。また、武田における類型論的分析は、キリスト教

3) 隅谷「同上論文」p. 5.

4) 隅谷『近代日本の形成とキリスト教』p. 3. ここで隅谷は、社会思想史的な視角のみが「教会史」の唯一の方法である、などと僭越に考えているわけではなく、この方法の特質と限界を定めようとした、とのべている。

5) 武田清子『土着と背教』iii, 新教出版社, 1967.

6) 『同上書』p. 5.

7) 『同上書』v.

受容の実態から出発するのではなく、結果としての類型論から出発するゆえに、結合形態が生ぜざるをえなくなるのである。⁸⁾

それゆえに、われわれの課題は、武田のモチーフをより徹底化して、むしろ無名ともいうべき信徒のキリスト教受容の実態とその内実を追求することである。社会的には少数派 *minority* であり、キリスト教の内部から見るときに多数派 *majority* である信徒が、この日本社会にあって、キリスト教に何を求めて入信し、個人の中でどのような価値の転換が行なわれ、キリスト教が、生き方にどのような規定を与えたのかを明らかにすることである。

I-2. 本論文の研究方法

明治以降の天皇制国家と資本制社会の形成の過程で、とりわけ太平洋戦争に向かって帝国主義が進行する中で、日本のキリスト教会は、新神学論争や、教派合同、国家主義とマルクス主義からの攻撃、日本基督教団の合同などを体験した。そのような大きな流れの中で信徒は黙々と教会と牧師を支え、一方異教社会である日本において、キリスト教を証明する存在として、また日本人としての市民権を得るために、「世俗社会」で生活したのである。そこでは、キリスト教の護教のためという発想や、自己の存在を意味づけるキリスト教的概念は通用しない。それゆえに日本のキリスト教会において、天皇制を頂点とする様々な問題や矛盾が、信徒において重層化し凝縮されているといえる。

われわれは、前述の二つの方法論の成果と限界をふまえ、信徒のキリスト教の受容を解明するため、武田の方法論をより精密に徹底化してケーススタディを試みなければならない。その場合のわれわれの前提は、隅谷が指摘したように、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」を区別して考察することである。ここで「聖なる教会」という場合、それは、個におけるイエス・キリストとの内在的緊張関係をさし、イエスとの出会いによって自らの生き方が問われ、一つの決断をなすにいたる根底的な生き方に関わる内発的契機である。「歴史的社会的教会」とは、このような「聖なる教会」の具現化したものとして、歴史的社会的制約を受けた人間の集団である。それは、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」が全く異質な要素を持っているというのではなく、その二重性、あるいは異なる側面を見据えねばならないということである。

以上の点をふまえ、信徒のキリスト教受容を考察するわれわれの方法は、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」を類的概念で捉えるのではなく、まさしく信徒一人ひとりの個の内に、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」とが内在していることに注目し、個人におけるその二重性が、どのような位相で関わっているか、その実態から出発しようとする。

それは、個人が歴史的社会的制約の中でイエス・キリストと出会い、生の根底を揺り動かさ

8) 例えば、内村におけるキリスト教受容の類型を対決型でもあり、接木型でもあるという現象を引き起こす。武田『同上書』p.12.

れ、歴史的社会的なこの「世俗社会」で生活し、行動するという、その関係をさぐることにほかならない。そして、キリスト教受容と歴史的社会的決断の間に生起する緊張関係が、個人においてどのような意味を持つのかを明らかにしようとする。

従ってこのような考察は、詳細なケーススタディによってのみ解明される。このケーススタディの対象設定は、まず、

(Ⅰ) その個人が、非キリスト教的環境で育ち、キリスト教に入信する場合

(Ⅱ) キリスト教的環境で育ち、キリスト教に入信する場合

とがある。そして(Ⅰ)について考察してみると、

(1) 入信以来、一貫してそのリアリティを保持し、自らの信仰を形成し、教会の構成員となる場合

(2) ある時期と契機を経て、キリスト教を去る場合

さらに、その場合、

(a) 「歴史的社会的教会」を去るが、「聖なる教会」に対するリアリティを根底に保持している場合

(b) 「聖なる教会」自体に限界を見て「歴史的社会的教会」を去る場合

がある。そしてその場合でも、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」との関わりをどのようなものとして捉えているか、ということも問題になろう。次に、(Ⅱ)について考察してみると、

(1) 親のキリスト教を自らの生き方の手本、目標として、自らの信仰を形成し、親にならう生き方をする場合がある。その場合でも、

(a) 積極的に教会のアクティブメンバーになる場合と、

(b) アクティブメンバーにならないが、自らの価値観がキリスト教に拠っているということを感じている場合がある。次に、

(2) 「聖なる教会」を、自らのものとしてではなく、親が勝手に「聖なる教会」を受け入れたのであるとして、

(a) 「歴史的社会的教会」の構成員とはならない場合と、

(b) 自らは「聖なる教会」による内的契機を経ずして、人間関係の場としての「歴史的社会的教会」に参加する場合がある。さらに、

(3) 自分なりに親の「聖なる教会」を対象化し、形成する場合であり、その場合でも、

(a) 「歴史的社会的教会」を、必然的な結果として必要とする場合と、

(b) そうでない場合がある。

もちろん、現実には、このように明解に分類できないが、信徒におけるキリスト教の受容の実態が、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」という二つの概念の相関によって、その位相が

変化するということが指摘できるであろう。われわれは、このようにあるがままの、あるいはあったがままの実態から出発し、その歴史的社会的状況をできるだけ精密に考察することにより、何が彼をして複数の選択肢から一つの方角と事柄を選び取らしめるに至ったのか、その動機、すなわちキリスト教の受容を考察しようとする。

そのゆえに、われわれは本論文において一人のキリスト者を取り上げ、前述の方法に従って彼の生き方とキリスト教との関わりを考察しようとするのである。

II 三浦襄の「南進」

II-1. 三浦襄の生いたち

三浦襄は、明治21年8月10日、東京神田区猿楽町に父宗三郎、母恵子の次男として生まれた。⁹⁾ 父宗三郎は日本基督一致教会の牧師であった。

父宗三郎は弘前の出身で、安政3年に生まれ、¹⁰⁾ 明治12年当時、東京大学医学部別課の医学生であった。¹¹⁾ 最初は麴町教会に出席したようであるが、後、下谷練堀町の植村正久の教会に出席するようになり、明治14年10月に植村正久より洗礼を受けた。¹²⁾ そして明治16年に宗三郎は医学部を卒業間際に中退し、一致神学校に献身の志をもって入学した。¹³⁾

この明治16年は、横浜における初週祈禱会を契機に全国的にリバイバルが起こった年である。宗三郎の献身に、このリバイバルが大きな影響を与えたであろうことは推測できる。

宗三郎は、この献身については、親の希望に添って医者となるか、国家の為に政治家を志すか、召命を受けて献身するかまよったが、結局誰にも相談せずに、たとえ親から勘当されてもという決意を持ち、誰からも勧められずに、止むにやまれぬ召命を確信して最後の道を選んだ。¹⁴⁾

明治19年宗三郎は、東京一致神学校での3年間の学びを終え、東京一致英和学校と合同した明治学院神学部第一回卒業生として、伝道の道を進むことになった。¹⁵⁾

9) 山内千造「インドネシア独立の尊い礎石となった義人三浦襄翁を憶う」『秋田』第19巻第6号、秋田社、昭和30年、p.23.

10) 原シズ『三浦襄の思い出』1976、p.1. 原シズは三浦のすぐ下の妹であり、本書は兄の回想記である。そこには、事実誤認や年代不確定等が数多くあるが、肉親ならではのエピソードや、その場に居合わせた者でなければうかがい知ることのできない真実味のある証言によって構成されており、それなりの資料的価値がある。

11) 三浦宗三郎「余が傳道時代の回顧」『基督教家庭新聞』第21巻第10号、p.7. 東京大学医学部別課は日本語で授業をなし、修業年限3年、学費は月額1円という速修科であったが、明治14年に廃止された。

12) 佐波亘編『植村正久とその時代』第3巻、教文館、1938、p.69.

13) 三浦宗三郎「前掲論文」pp.7-8.

14) 三浦宗三郎「前掲論文」pp.7-8.

15) 東京一致神学校と東京一致英和学校との合同式およびその卒業式は、明治19年6月22日、東京木挽町の明治会堂でなされた。その時の神学校卒業生は11人であると書かれている。『明治学院90年史』pp.78-80.

母恵子は、父内田十作、母はま子の長女として明治元年11月23日姫路藩江戸藩邸で生まれた。¹⁶⁾ 恵子の母はま子は、日本のバプテスト派の最初の女性受浸者である。¹⁷⁾ 内田十作は旧姓川崎といったが、内田家の嫡男正の後見人という形で、内田家の家名存続のために内田家を継いだ。¹⁸⁾ そしてはま子は、恵子が生まれたあと、維新の混乱を避けて一時期姫路に住んだが、明治7年に上京し、間もなく十作は死去した。はま子は、正、恵子を抱えて苦しんでいた時に、築地新栄教会に出入りするようになり、¹⁹⁾ 明治8年9月駿河台に移り、宣教師アルソル Arthur 一家のホームヘルパーをするようになり、11月6日、アルソルより神田川でバプテスマを受けた。²⁰⁾ 駿河台に移ったのは、同年に北バプテスト教会のアルソルとキツダ Kidder が駿河台に駿台英和女学校を建てたからである。恵子はこの駿台英和女学校で学んだ。²¹⁾ そして明治12年、伯父であり、牧師である鳥山正心よりバプテスマを受けた。²²⁾

明治18年に宗三郎と恵子は結婚した。²³⁾ この頃、宗三郎はまだ一致神学校に在学中であったが、すでに植村正久の下谷教会を応援していたようである。²⁴⁾

父は一代目のクリスチャンで牧師、母はすでに二代目である。宗三郎の実家は、現在ではもはや確証はないが、宗三郎が東京に遊学できたことや、宗三郎の入信時の煩悶の仕方と方向を考え合わせると、弘前藩の士族か、藩医、あるいは町医者という階層にいたのではないかと推論しうる。もしそうであれば、宗三郎の入信過程は、最初期に入信した者が旧幕府側下級武士に多かったという通説を裏付けすることになる。²⁵⁾

母恵子は幼時より外国人宣教師家庭で育ち、最初期のキリスト教主義女子教育を受け、明治21年には英語教師試験に合格し、訓導になり、また基督伝を翻訳したり、通訳をするような女性であった。²⁶⁾ 新しいキリスト教に基づく価値観をほとんどストレートに受け入れて育った母恵子は、宣教師家庭の家庭生活に親しむ、明治の最もハイカラな女性の一人であったのである。

16) 原鉄太郎「故三浦恵子の略歴」三浦懿美編『三浦恵子』大正15年、p.3. 恵子は、大正15年2月23日に死んだが、本書は遺族、知人による追悼文集である。恵子の略歴、葬儀での説教、弔詞等が収録されている。その性格上、恵子を高く評価する傾向は否めないながらも、その生活と家族、家庭の雰囲気はうかがい知ることができる証言集である。

17) 高橋楯雄『日本バプテスト史略・上』東京三崎会館、大正12年、pp.49-53.

18) 三浦恵子の長女シズとのインタビュー。1976年7月20日、姫路。

19) 当時はま子は本郷弓町に住んでいたが、毎週日曜日に徒歩で恵子連れて築地まで通った。高橋楯雄『前掲書』p.50.

20) 高橋楯雄『前掲書』p.52. その光景は、「若い日本の女が西洋人と心中する」また、「若い日本の女が西洋人から折檻を受けている」と騒がれるようなものであった。

21) 原鉄太郎「前掲論文」p.3.

22) 原鉄太郎「前掲論文」p.3.

23) 原鉄太郎「前掲論文」p.3.

24) 佐波亘編『前掲書』p.58.

25) 隅谷三喜男『前掲書』p.17.

26) 原鉄太郎「前掲論文」pp.3-4.

その家庭は、後の各地での伝道生活の中でどのような雰囲気と原理を持っていたのであろうか。裏の兄、長男懿美は、次のように述べている。「牧師の収入は僅少でありながらも、牧師としての体面を保ち、更に貧者、窮困者を労わり」²⁷⁾ 家族の者が「教会礼拝に欠席した時は、最も機嫌が悪く」²⁸⁾「来客を好み」²⁹⁾ 宣教師家庭で育ったため、ケーキやパンを焼く生活をし、経済的には困難な中にあってもその困難さに圧倒されるのではなく、牧師家庭の内実化を志向する家庭だった。³⁰⁾ そこには、経済的にはともかく、³¹⁾ 社会的には一定の立場を保持した、いい意味での地方知識人家庭があった。

裏は、このような家庭で育った。父宗三郎は明治19年に卒業し、福島県相馬、仙台、米沢、岩沼と、日本基督教会宮城中会で伝道した。この間の各教会の在任期間は正確にはわからない。³²⁾ ただ秋田教会にはその当時の資料が残っており、宗三郎は、明治33年5月に秋田教会の第四代牧師として着任した。

この間、裏は小学校時代に悪性眼病にかかり、その治療のため一年学校を遅らせ、上京して伯父鳥山正心³³⁾ の家に寄宿しつつ、東大病院眼科に通院し、全快したのちに家族の待つ秋田に行った。³⁴⁾

秋田教会³⁵⁾ では、明治34年に婦人会が創立され、36年には青年会が創立された。³⁶⁾ 当然、裏は兄懿美と共に青年会のメンバーとして活動したと思われる。裏は、秋田で通常の学齢を一年遅れて秋田中学に入学した。³⁷⁾

この頃秋田教会の日曜礼拝出席は、平均16名、現住陪餐会員18名となっている。³⁸⁾ そして信徒求道者は市内だけでなく、大曲、土崎、能代など周辺地域に点在していた。³⁹⁾ 父宗三郎はそれらの広範な地域を巡回伝道していたと思われる。宗三郎は、この秋田で地味に着々と伝道し

27) 三浦懿美「信仰と奮闘の生涯」三浦懿美編『三浦恵子』pp. 11-12.

28) 「同上論文」p.12.

29) 「同上論文」p.12.

30) 「同上論文」p.14.

31) 三浦一家が米沢から岩沼へ転勤する時、一家7名は、徒歩で峠を越えた際、裏はその途中で病気になり、懐具合も乏しく、母は長女シズを背負い、死にものぐるいで旅を続けたと、長男懿美は回顧している。三浦懿美「同上論文」p.12.

32) 『仙台東一番丁教会80年史』昭和37年、p.12 には、福島県中村の三浦宗三郎を請うて仮牧師としたが、明治28年3月に辞職したと記されている。また米沢、岩沼の各教会には資料は残存していない。

33) 鳥山正心は裏の祖母、内田はまの兄で、バプテスト派の最初の日本人牧師として按手礼を受けた2人のうちの1人である。高橋楯雄『前掲書』p.89.

34) 原シズ『前掲書』p.4.

35) 秋田教会は、正式には日本基督教会宮城中会秋田講義所であった。まだ経済的に自給できなかったからである。

36) 秋田教会には当時の活動記録、集会記録が保存されている。それぞれ所定の書式に、毛筆で細かく書き込まれている。筆者は秋田教会を訪れ、それらを閲覧できたが、複写はできなかった。

37) 原シズ『前掲書』p.4.

38) 「日本基督教会秋田教会所蔵の資料」

39) 「同上資料」

た。

日露戦争の時、宗三郎は負傷兵の慰労会を計画し、⁴⁰⁾ また中会が計画した戦時大挙伝道を試みた。⁴¹⁾ そこには、日本のキリスト教会の大勢がそうであったように、⁴²⁾ 国家目的を疑うという意識はなく、ただ国家目的の遂行によって生ずる犠牲者を、落穂拾いのように救済してゆこうとする人道主義と、あらゆる機会を伝道の機会として捉える便宜主義が混在している。

もう一つ、宗三郎の秋田伝道で特筆すべきことは、阿仁合伝道である。⁴³⁾ 『東北教会時報』明治36年11月10日号にはその報告が掲載されている。それを要約すると、「阿仁合町は、阿仁鉾山のある戸数 500 戸、同製錬所に 200 名近くの人が働く町である。同製錬所在職の高橋源太郎は、7,8 年前に受洗して以来、一人で信仰を持っていたが、岸直治と共に、三浦宗三郎を迎えて尽力して数回の集会を持つ。その時、神官僧侶などの質問もあり、聴衆真剣に聞き、ついに演説会後、男 2 名女 2 名の受洗者を出す。時刻は夜半 2 時半頃であった。その後僧侶等の反対演説会が開かれたので、当方 4 昼夜連続の説教会を持ち、15 名の求道者、内 1 名の受洗者を得る。町内、キリスト教、仏教と宗教論議が高まり、子供らの間でもそれはなされた。数名の受洗志願者が、三浦宗三郎の来るのを待っている。信徒は、毎夜高橋宅にて集会を持ち、聖書研究をしている。まるでリバイバルのようだ。」

そのような中で、36年12月には11名の受洗者を得、貧民救恤会および教会設立の決意をした。このような燃え上がりを見せた阿仁合伝道はなぜか頓挫し、宗三郎は秋田を去ってハワイ日本人教会への転出を希望するに至る。その具体的契機はわからない。ただ、ここで指摘する事柄は、伝道の困難さであろう。そして貧民救恤会と教会設立の決意を同時にするということとは、キリスト教が一般にどのようなものとして受け入れられていたのかをよく表わす。そこでは、キリスト教は倫理宗教として受けとめられていたのである。⁴⁴⁾ しかし宗三郎は、キリスト教が倫理宗教としてしか受け入れられないがゆえに、そこに限界を見て、ハワイ日本人教会への転出を願ったのではおそくないであろう。宗三郎は、秋田伝道、阿仁合伝道で何を得、何を失い、ハワイ日本人教会に何を求めたのか、すでに正確に判断しうる資料はない。ただ襄がこの多感な時期に、父の生き方と父を生かしめるキリスト教を、どのようなものとして受け

40) 負傷兵と共にロシア兵捕虜をも迎え、教会を挙げてその慰労をしている。「日本基督教会秋田教会所蔵の資料」および原シズ『前掲書』p.7.

41) 秋田教会では、集会 2 回、人員百名、集金2500、諸入費1000、受洗 0 と報告している。『東北教会時報』明治37年11月10日号。

42) 日露戦争の時の内村鑑三、柏木義円の非戦論は有名であるが、大勢として、国家目的のための戦争に対するキリスト教の側からの批判はほとんどなかったといえる。

43) 東北学院大学に所蔵されている宮城中会関係資料および『東北教会時報』に、秋田講義所からの報告が掲載されており、教会とその伝道活動の様子的一端をうかがい知ることができる。

44) 日本のキリスト教は、一般に、アメリカのピューリタニズムと儒教が結びつき、倫理的な側面から受け入れられたといわれる。大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、昭和45年、pp. 264-277参照。

入れていったのが問題である。

宮城中会は、合衆国ドイツ改革教会 Reformed Church in the United States (German) との関係が、鎮西中会と同様なかなか切れなかったゆえに、⁴⁵⁾ いろいろな面で宣教師よりの援助を受けたことは想像できる。まして秋田教会の場合は、正式には講義所で、経済的には自給していない。中会とミッション双方から支援を受けていたと思われる。それにしても経済的には恵まれた状態ではなかったことは事実である。裏は、秋田中学在学中に、牛乳配達のアパートをやった。⁴⁶⁾ 父の牧師としての生活、非キリスト教社会で牧師の息子としての自分、そしてその結果の経済的貧困さ、その中にある生活。裏はこれらの事柄をあるがままの現実として受け入れていったようである。とりわけ母恵子はユーモアを解する人であった。その性格は裏にも伝わった。⁴⁷⁾ そして阿仁合伝道の混乱が続いていたであろう明治38年3月6日に、裏は父宗三郎の手によって、3名の青年と共に洗礼を授けられた。⁴⁸⁾

宗三郎のハワイ日本人教会赴任については、植村正久の反対もあり、⁴⁹⁾ 単純には決まらなかったようだが、とにかく明治38年11月にハワイに出発し、⁵⁰⁾ 一家は東京港区の明治学院の近くに引っ越し、裏は秋田中学から明治学院普通部に編入した。⁵¹⁾ 兄懿美は、東北学院中学部を経て早稲田大学の学生であった。⁵²⁾ この父宗三郎の在米期間中が三浦家にとって最も困窮の極にあった時期である。裏の上の兄1人、下に5人の弟妹がおり、一時期は食料品店への支払いが滞ったこともあったが、⁵³⁾ 母恵子は、留守を守る母として主婦として働き、その上英語を教えて家計を支えた。⁵⁴⁾ この時、父宗三郎からの送金は少なかった。⁵⁵⁾ このような状況の中で、裏は明治学院での生活をするのである。彼は学院では競漕部のメンバーであった。⁵⁶⁾ この頃、学院では井深梶之助が英語、熊野雄七が修身を教え、石原謙も教えていた。⁵⁷⁾

45) 宮城中会は鎮西中会と同様、ミッションとの関係が強く、植村の教会の経済的自立を志向する方向と相違するので、植村はよくこぼしていたという。植村環とのインタビュー。1977年5月9日、東京。

46) 当時、中学生がアルバイトをすることは恥ずべきこととされたので、一般に顔を布で覆いつつ仕事をしたといわれるが、三浦はいっさいそのようなことをせず、中学の帽章もはっきり見えるように帽子をかぶったので評判になり、新聞に載ったということである。また三浦は、牛乳配達をするに際して、病人家庭や貧困家庭には、マスを多めに量って配達していたという。原シズ『前掲書』p.6.

47) 三浦宗三郎「追想」三浦懿美編『三浦恵子』p.103.

48) その3名は佐藤資三、薄井道亮、糟谷建夫である。「日本基督教会秋田教会所蔵の資料」

49) その反対理由は、判然としない。最初、宗三郎のハワイ行きの希望は、植村の反対によって一時頓挫し、宗三郎も一度は思い直したが、結局はハワイに行くことになった。『東北教会時報』明治38年7月5日号、および10月5日号。

50) 「日本基督教会秋田教会所蔵の資料」

51) 原シズとのインタビュー。1976年7月20日、姫路。および原シズ『前掲書』p.8.

52) 原シズ『前掲書』p.8.

53) 三浦宗三郎「前掲論文」p.106.

54) 「同上論文」pp. 105-106.

55) 「同上論文」p.106.

56) 明治学院『白金学報』第9号、明治39年7月に端艇部の記事があり、その中に三浦裏の名前が見える。

57) この頃、普通部の生徒であった落合太郎が、当時の明治学院の状況を回顧している。『明治学院90年史』pp. 114-116.

この頃、襄はよく貸本屋で雑誌などを借りてきては読んでいたという。⁵⁸⁾ したがって、襄は困難な家庭状況の中にありながらも、その状況に押しつぶされることなく、素直な明朗な青年として育ったといえる。特に、父の牧師としての使命を十分に認識し、その陰で苦勞している母を思い、それらに対する優しさと共に、一種の義侠心、正義感をもつ青年として育った。また襄の性格は、日本という非キリスト教社会にあって、牧師の息子という例外的な環境にあっても決して偏狭なものではなく、非キリスト教徒とも親友の交わりができるという幅広い許容性のあるものであった。⁵⁹⁾ それゆえ、襄が牧師となって直接的伝道を志したのではなく、経済的に父や母を助け、それで伝道に参加したいと思うようになった要因が、このような環境によってつくられていったといえる。

そのような明治学院生活を続けているうちに、襄は南洋商会に入会する契機を持つ。明治42年3月卒業予定であったが、41年11月に学院を中退し、翌42年4月に日本を出発してインドネシアに渡るのである。

II-2. 渡南——南洋商会

三浦襄が南洋商会の会員になって渡南した契機に二つの説明がある。

一つは、植村正久が直接三浦家を訪れ、母恵子を説得したというもの。日本基督教会の中心人物である植村と当時滞米中であった父宗三郎とは、宗三郎が宮城中会所属のいわば田舎牧師であったにしても、両者は非常に近い関係であった。⁶⁰⁾ この説明は妹シズの証言である。⁶¹⁾

他の一つは、南洋商会の設立者堤林数衛^{つづみばやしかずえ}が、植村の支持によって全国のキリスト教会に公募し、三浦がこれを見て自発的に志願したという説明である。この募集には二百数十名の応募があり、堤林はそのうちから「志操堅実で品性優秀なもの15名」を選んだ。⁶²⁾ 年齢は、15,6歳から27,8歳であったという。この二つの説明は相互に矛盾する。すなわち、三浦は自発的に南洋商会の会員となったか否かということである。

後者の説明について考察してみると、その当時、植村が使用できた全国規模の宣伝媒体である『福音新報』には、南洋商会の公募記事は一切掲載されていないし、南洋商会に関する記事さえない。会員になった15名の青年が全員キリスト信徒であり、二百数十名の応募があったと

58) 原シズとのインタビュー。1976年7月20日、姫路。

59) 明治学院に同じ頃編入学してきた鈴木且三との親交は終生変わることはなかった。彼はクリスチャンではなかった。鈴木且三の長男太郎とのインタビュー。1977年5月10日、横浜。

60) 植村の娘環自身「宗三郎おじさん」と呼んで親しんでいた。もっとも植村は、環にそのような気安い呼び方を禁止していたが、環たちはそう呼んでいたという。植村環とのインタビュー。1977年5月9日、東京。

61) 原シズ『前掲書』p. 8.

62) これは、『山形県史』拓殖篇、p. 904によるが、これ自体は二次資料で、その一次資料というべき、堤林数衛『南洋商会創立拾年之苦心談』によれば15名という数字は一致するが、それ以外、すなわち応募者数についてはふれられていない。

すれば、当然あらゆる機会を用いて宣伝したはずである。そして三浦個人に関していえば、彼は42年3月には明治学院普通部を卒業する予定であったにもかかわらず、卒業寸前に自発的に応募したかどうか疑問である。

筆者は、この二つの説明のうち、どちらを取るべきなのか断定はできないが、どちらかといえば前者のほうが可能性が強いように思われる。もしかしたら公募は行なわれていたのかもしれない。しかし三浦に関しては、植村自身が父宗三郎在米中の三浦家を訪問し、母恵子や妻を説得することなしには商会加入の応諾はないと思われる。

三浦が南洋商会に加入したのは明治42年の1月である。⁶³⁾ この時期には、後述するいわゆる「南洋熱」はまだ起こっておらず、国民は、朝鮮半島、満州という大陸の方向に注目していた。したがって、南洋に行こうというのはよほどの決意がなければならない。

われわれは以上の状況を判断して、三浦は植村の訪問と説得を受けて南洋商会に入会したと判断したい。

では、南洋商会を設立した堤林数衛とはどのような人物であり、何を南洋に求めたのだろうか。⁶⁴⁾

堤林数衛は、明治6年12月山形県新庄市に5人姉妹にはさまるただ1人の男子として生まれた。父は新庄藩の百五十石取り槍術師範であったが維新後没落し、堤林は小学校上等科を中退しなければならなかった。その後、代用教員、監獄の押丁、次いで看守となり、収入の半分を家計に入れた。明治28年、堤林は看守をやめ、新天地を求めて北海道に渡ったが失敗した。この年に、日清戦争で日本の領土となった台湾の総督府が看守を募集していたのでこれに応募し採用された。台北に渡った堤林は、語学学習の目的から多くの人びとと交際し、手広く貿易をしていた郭春秧と知り合った。時節柄日本人の登用の必要性を痛感していた郭春秧は、堤林を自分の商館に採用し、堤林は看守を辞職した。

堤林は郭の法律顧問兼郭河東公司の書記長として勤務し、台北市内に呉服屋と質屋を開業した。また、台湾総督府が資源開発のために新鉱区発見者には無料で下付する制度を作ったのを知り、奥地探検をして炭鉱脈を発見した。このように順調に台湾の生活を築いた堤林は、明治40年新庄に帰省して結婚し、没落した家を10年がかりで再興した。日本に帰って家庭を持って落ち着いた堤林は、ここで10年前台湾に渡った時と同じく、人生の転機を迎えた。

堤林は、長い間商売に従事して損益に没頭していた間に金銭欲が募り、品性が墮落しつつ

63) 厚生省所蔵「第二南遣嘱託履歴」にある三浦の自筆履歴書によれば、三浦の明治学院の中退は、「明治41年11月」となっている。(なお「履歴書」は、表1を参照。) またそれらの疑問点についての論述は、本論文 p. 46参照のこと。

64) 堤林については、彼をケーススタディとしてとりあげて歴史的に位置づけた、矢野暢『「南進」の系譜』および矢野暢「堤林数衛の精神的「回心」——「南方関与」の近代的類型——」『東南アジア研究』15巻3号を参照のこと。なお『山形県史』拓殖篇, pp. 901-924と、堤林数衛『南洋商会創立拾年之苦心談』も参照した。

あったのに気付き、ただ衣食住だけの満足を求めるのではなく、生命の充実と精神的にも意義あるもののために働きたいと考えるようになり、いっさいの資産を手離して妻と共に上京し、読書修養の人となり、宗教書、哲学書をむさぼり読むようになった。そして植村の牧する富士見町教会に出席するようになり、熱心なキリスト教信者となったのである。彼は35歳であった。この時、彼はまだそれ以後の具体的な計画を持っていなかった。

堤林は、明治41年の暮から正月にかけて、自分の残る半生をいかに用いるかという問いを持ち、宣教師マッソン Masson⁶⁵⁾と共に伊豆半島から大島へ伝道的行脚をし、三原山の噴火口の傍らに坐して独り長い祈禱をし、黙想しているうちに一つの結論を与えられたのである。すなわち、「(恰も其頃米国では日本移民排斥問題が盛んになって、海外に発展せんとする我青年の行き場に困って居たので)、自分は従来 of 智識を茲に活用して此の国家的困難を救済し、一面正しき営利を以て日本の伝道を助け、自分にも同胞にも精神的満足な事業を起さう。之こそ神に対する唯一の謝恩である」と考えたのである。

堤林はこの結論に立って南洋商會を設立することを決意し、このことを植村に述べ、協力を依頼した。

植村はこの依頼を受けて、同志の募集をし、また、富士見町教会会員であった福島友雄、木岡甲子男⁶⁶⁾ 実業家たちの協力をも取りつけた。福島友雄は富士見町教会長老であり、帽子などの雑貨を扱っていた。⁶⁷⁾ 彼ら教会員は、商品供給等の、いわば後方基地を作って支援した。植村は、礼拝説教ではいわゆる時事問題、社会問題等を説くことはしなかったが、礼拝説教以外の祈禱会の席上などでは時事問題や教会員の動向について触れた。⁶⁸⁾ そのようなわけで当時、四、五百人の教会員は堤林の試みをよく知っていたという。⁶⁹⁾ 植村が堤林の南洋商會を支援したのは、南洋商會が「商売」と「伝道」を兼ねた試みであったからにはほかならない。

日清・日露両戦争を経て、日本の権益が大陸、台湾に拡大されるや、日本のキリスト教各派は植民地伝道を開始したが、それらは、植民地化の問題と植民地国民のナショナリズムについて複雑な問題を内在させていた。それらの教会は日本人のために設立されたものが多い。⁷⁰⁾ しかし植村は、単純に海外伝道を肯定し、推進してはいない。⁷¹⁾ また、植村の持論である海外ミ

65) マッソンは、明治35年1月12日に大島に来島して伝道を開始し、同39年11月に伊豆、伊東教会に転じた。白川藤太郎編著『伊豆大島傳道50年史』日本基督教団大島元村教会、昭和17年、pp. 13-21. マッソンはプリマス・プレゼンズの宣教師であった。

66) 植村環とのインタビュー。1977年5月9日、東京によれば、この2人が協力したことを証言した。

67) 福島友雄の長男正雄とのインタビュー。1977年5月9日、東京による。彼は当時慶応義塾の学生であった。

68) 植村環とのインタビュー。1977年5月9日、東京。

69) 同上。

70) 大内三郎『前掲書』pp. 420-432 を参照のこと。ここで大内は植民地伝道の諸問題を詳しく検討している。

71) 植村正久「台湾の伝道」『植村正久著作集』第6巻、pp. 164-165。

ッションからの経済的自立は、日本基督公会以来の主張であり、明治37年の日本基督教会大会には、植村の力で「独立自給決議案」が提出され、修正のうえ可決されたこと⁷²⁾や、自主的に伝道者養成を目指した東京神学社を設立したことからも明らかである。植村の存在は、組織人としてよりも、その人間的魅力によって大きかったということも周知の事柄である。植村の海外伝道は大正6年に梅森豪勇をシンガポールに送った場合もそうであったように、⁷³⁾ 組織的ではなく、植村個人の人間関係によって依頼され、送り出すパターンであった。

したがって堤林の主宰する南洋商会の設立と渡南は、全体的包括的な日本キリスト教史の脈絡からではなく、堤林がキリスト教信徒として植村の牧する富士見町教会にいたという偶然性によるものであるといえる。

堤林が伊豆で南洋商会の設立を思い立ったのが明治41年の暮から42年の正月である。そして南洋商会の会員の選定や商品供給等の手配を完了したのは同年2月のことであり、非常に短期間にそれはなされた。したがって、1カ月の期間で公募し、その他の業務を完了することはかなり困難だと思われる。前述の「公募」に対する疑問の理由がここにもある。

ところで三浦の明治学院中退は、のち厚生省に提出した履歴書⁷⁴⁾によれば、41年11月であり、堤林が大島で南洋商会設立の契機を持ったのが41年暮から42年の正月にかけてであることから考えると、この二つの資料は矛盾している。三浦は、いわゆる成績不良のために中退したのではない。⁷⁵⁾ 三浦の中退は、南洋商会に加入するためなのである。とすれば、この履歴書に記載した明治学院中退の期日は三浦の記憶違いの可能性がある。⁷⁶⁾

ともあれ堤林と商会の会員は、渡南を前にして明治42年2月に、商売のこづを学び、また彼らの忍耐力を養い、さらに相互理解を深めるために、化粧品・雑貨等を持って1カ月間東海道を行商しながら西下した。そして一人の落伍者もなく東京にもどった。

東京にもどった三浦は、南洋への出発に先立って、3月8日秋田教会から高輪教会に転会した。⁷⁷⁾

72) 青芳勝久『植村正久伝』教文館出版部、昭和10年、pp. 375-377.

73) 藤原藤男編著『梅森豪勇と南洋開拓伝道』キリスト新聞社、昭和52年、p.21. このシンガポール伝道もシンガポール在住日本人を対象としていた。

74) 巻末資料表1参照のこと。

75) 原シズとのインタビュー。1976年7月20日、姫路。原は三浦の明治学院の中退が南洋商会加入のためであることを指摘し、けっして三浦の成績不良などが理由ではなかったことを証言した。

76) 明治学院の在学生記録は、残念ながら三浦の所定の書式が綴られている1冊だけが欠損しており、三浦の秋田中学からの編入学、中退の期日を証明するものはない。しかし、『白金学報』第16号には明治42年3月普通部卒業予定として写真に写っている。これは明治41年12月号である。それゆえ三浦の退学が11月というのは信じがたい。

77) 「日本基督教会秋田教会所蔵の資料」

南洋商会の一行は、4月14日⁷⁸⁾ 富士見町教会の前で記念の写真を撮り、さらに新橋駅頭において送別の祈禱会を開き、⁷⁹⁾ 横浜から神奈川丸で出帆した。船が門司、上海、香港、シンガポールに碇泊するごとに彼らは時間の許すかぎり行商をした。⁸⁰⁾ 彼らは、5月13日に目的地ジャワ島スマラン Semarang に着き、翌日には、アロー街⁸¹⁾ に家を借り、卓一脚で開店し、行商を開始した。

堤林がジャワ島スマランを選んだのにはいくつかの理由がある。まず42年2月にやっとバタビア（現在のジャカルタ）に日本領事館が開設され、正式な海外渡航が認可され、法的保護が受けられるようになったこと、次に郭河東公司の支店があり、堤林が30年代に一度ならず訪れた経験があったこと、および小川利八郎という先住の日本人がおり、その小川の姉の北原哲子は、牧師未亡人、という因縁があったこと、さらに、堤林自身が、過去10年間台湾を中心に、南洋で生活した体験を通して中国人、印度人などの現地の経済状況等を熟知し、日本製品がこの地域に適しており、人種、人情、風俗、宗教などの文化的背景に共通理解を持ちうると考えられたこと、さらにまたこの地域は、開拓の余地が充分にあることであった。⁸²⁾ そして、事業の進め方として、(1)体を以て立つ行商時代、(2)体と金力を併用する小売時代、(3)知識と金力を活用する輸出入貿易、(4)事業の根底を強固にする諸機関の自営と農園鉱山の経営、(5)事業の理想郷、の5段階を想定し、⁸³⁾ そして従来の日本人移民の生活態度を評して、「日本人海外発展の根本的欠点は、永住心を欠くに在り、殊に赤手海外に起業する諸君に於ては、之れを根本生命なりと覚悟すべし。心地に着かずんば躓き倒れ、事業に永久性なくば一時の砂上のバラック、何ぞ世の風雨に堪えるの理あらんや」⁸⁴⁾ と述べ、日本人としてその地域に根をおろし、その地域の経済活動に責任と自覚を持って関わろうとした。

スマランで商売を開始した三浦たちは、堤林の厳格すぎるほどの指導を受けて生活した。⁸⁵⁾

78) 堤林数衛『南洋商会創立拾年之苦心談』p.12. しかし、この『…苦心談』を一次資料として書かれたと考えられる『山形県史』拓殖篇、p. 905には出発の日付けは15日となっている。なお、『福音新報』明治42年4月15日号には、「14日出発予定」という記事がある。『…苦心談』は、南洋商会が株式会社になって最も充実していた時期に、新入社員に商会の歴史を伝えるため、また古参社員にも設立当初の辛苦を思い起こしてもらうために書かれたものであり、大正7年に刊行された。なお矢野暢『前掲書』および「前掲論文」参照。

79) 三松俊平『植村先生の思い出』アルパ社書房、昭和10年、p.260. これは南洋商会に関して、いわゆるキリスト教の側からの唯一の記述である。しかもこれは、植村が組織して送り出したと書かれており、南洋商隊という名で書かれている。つまり、南洋商会が日本のキリスト教会から注目をあびるような事柄ではなかったということを示す。

80) それは船賃等、経費の軽減にもなった。堤林数衛『…苦心談』p.14.

81) 堤林数衛『…苦心談』p.14. しかし、大場条太郎「南方先駆者堤林数衛氏と南洋商会」『ジャガタラ閑話』（武田重三郎編、昭和43年）p. 89によればガンワロン街となっている。

82) 堤林数衛『…苦心談』p.10. 矢野暢「前掲論文」p.311.

83) 堤林数衛『…苦心談』p.11. 矢野暢『前掲書』pp. 95-96.

84) 矢野暢『前掲書』p.93. この記述は堤林の『販売所百言目次』第一章三項を引用したものである。

85) 堤林数衛『…苦心談』p.15.

明治43年2月3日の堤林の日記には、商会の就業規則のような覚え書きがある。⁸⁶⁾

一、午前六時迄起床七時迄礼拝食事私用一切を済す事

一、午前七時開店午後九時閉店正午一時半休息私の時間と定む

…略…

一、業務以外に於て協同的にして上下なく真の兄弟たる誠情を表はす事

一、教会教友家族友人の通信を勉むる事

…略…

一、可成集会を開き精神の修養に信仰の向上を期する事

…以下略…

われわれはこの覚え書きを通して、南洋商会の日常業務の厳しさと同時に、その集団の原理が教会的発想を持っていることに注目したい。南洋商会においては、当初堤林は社主ではなく、商会員すべてが同志とされていた。⁸⁷⁾ 堤林は、経験あるゆえにあらゆる面で指導者ではあったが、基本的にはキリストのもとにある兄弟という同志的關係であった。それは、堤林にとって、彼なりのキリスト教に基づく指導理念であり、理想的組織の具体化だったのである。

彼らは、「一人の邦人と雖も過ちを犯さば祖国を傷つけ邦人全体の面目に関したので、日々緊張の生活であり、安易儉安は禁物」⁸⁸⁾ という自覚と責任を持ち、「自分の背中には『日の丸』の旗がある。』⁸⁹⁾ という気持ちを持っていた。

そもそも日本人の「南進」は、娘子軍によって、明治初期から開始されていた。⁹⁰⁾ 彼らを「南進」の第一段階として位置づけることができる。とりわけインドネシアの場合は、娘子軍と共に、売薬行商が多かった。⁹¹⁾ 彼らが行商の段階を経て、「トコ・ジュパン」Toko Djepang（日本人の店）を形成していった。第二段階は、日本が日露戦争に勝ち、南洋に在住する日本人が、外務省在外公館の開設によって法的保護を受けるようになる明治40年代からである。この第二段階に南洋に渡った日本人は、自他ともに日本人が一等国民であることを証明するた

86) 矢野暢『前掲書』pp. 93-94および「前掲論文」p.317. 現在この日記は矢野暢が所蔵している。

87) 堤林は、「自分は唯此事業の主唱者として教導の任に當る丈けで、勿論主人ではなく、会員も亦総て同志の共同経営者で」と述べている。堤林『…苦心談』p.16.

88) 武田重三郎編『ジャガタラ閑話一蘭印時代邦人の足跡一』p.3.

89) 大場条太郎とのインタビュー。1976年8月20日、新庄。大場条太郎は、大正7年に南洋商会に加わり渡南した。堤林は帰郷するたびに新庄中学で講演し、幾人かの青年を伴って南洋に渡った。

90) 山崎朋子『サンダカン八番娼館』（筑摩書房、昭和47年）；『サンダカンの墓』（文藝春秋社、昭和49年）；森崎和江『からゆきさん』（朝日新聞社、昭和51年）を参照のこと。山崎朋子は『サンダカンの墓』p. 196で、日本のアジア侵略初期における＜肉体資本＞にはかならなかった、と指摘している。また、村岡伊平治『村岡伊平治自伝』南方社、昭和35年、p. 57には、「どんな南洋の田舎でも、そこに女部屋がでけると、すぐに雑貨店がでける。日本から店員がくる。その店員が独立して開業する。」と書かれており、初期の日本人の進出のパターンが如実に描かれている。

91) 西嶋重忠『証言インドネシア独立革命一ある日本人革命家の半生』新人物往来社、昭和50年、p. 74. この時期の「南進」は、いわゆる正業に従事するのではなく、いわば日本に住めなくなった人間の海外流出であった。

めに、娘子軍たちを国の恥として、彼らの存在を疎ましく感じるとともに、日本のために、近代的企業経営を目指すようになった。南洋商会の「南進」は、まさにこのような時期だったのである。その意味で、南洋商会の「南進」は、歴史的に大きな意味がある。

明治43年に刊行された竹越與三郎の、「南へ！南へ！」で始まる『南国記』は、日本国内で爆発的ブームを呼び、国民に「南洋熱」を与えた。そして大正に入って、日本が第一次世界大戦の戦勝国になり、ドイツにかわって南方諸地域の権益を獲得するや、財閥系商社の「南進」は、その加速度を増し、太平洋戦争までの、第三段階の本格的な「南進」の伏線となるのである。ともあれ、この第二段階の「南進」の基本構想は、きわめて実利的な「南進」であった。⁹²⁾ その「南進」を支えるため、彼らは強烈に「日本」を意識したのである。そしてそれ以上に南洋商会の場合には、「伝道と商売」という、その意味で実利的というよりも、精神的な使命観に基づいた目的意識があった。

彼らは、現地語も解さぬまま、手まね口まねで各家を訪問し、行商に突進して行った。炎天下の町や村を、山間の奥地まで、主として徒歩で、汗と土埃にまみれながら歩き回った。単独で釦付詰衿の服を着、ヘルメット姿であった。商品は主として売薬、雑貨であった。⁹³⁾

しかし、三浦を含む数人の青年は1年を経ずして南洋商会を去った。その正確な理由は判らないが、おそらく堤林の厳格な営業方針、経営方針に不満を持ったことが最大の理由であったと推察される。⁹⁴⁾ しかし、理由はそれだけだったのだろうか。「南洋商会」の設立目的は、「商売」と「伝道」の二本柱だったはずである。現在われわれが目にする資料では、その設立目的がその後どのように具体的に展開されたのか、されようとしたのかいっさい不明である。筆者はここで、1年近い共同生活を経る中で、論理とは別に、「キリスト教理解」「信仰理解」の差が明らかになってきたのではないかと推論する。南洋商会の会員は、全員キリスト者青年であり、植村を中心とした富士見町教会が支援したのである。

堤林を掘り起こし、ケーススタディを試みた矢野暢によれば、堤林の特徴は、第一に規律をひじょうに重んじた。しかしそれは、いわゆる前近代的な暴君タイプではない。それは、「天意の主従」という堤林個人と神とのいわば垂直的な関係を、水平的な人間関係にも求めるよう

92) 矢野暢『前掲書』p.147.

93) 「日本人は、支邦人と間違われやすいため、若い青年でも何れもカイゼル型の美髭を蓄え、カンカンの麦稈帽子かヘルメットを載いて、洋服は全てオランダ人同様に詰衿の五つ釦を、この暑い熱帯で着用していた。また、華僑とは異なり、メリヤスやステテコでの姿ではなく、注意を払って日本の体面を重んじていた。苦心の体が窺われるのである。体裁ばかりでなく、対人関係に於ても反感を持たれないように自重していた。」石居太楼「爪哇邦人草分け物語」『ジャガタラ閑話』pp.42-43. 大正年間以後の三浦の写真を見ても、常にネクタイをしめている。

94) 堤林数衛『…苦心談』p.15によれば、堤林は強烈な使命観に基づいて厳しく青年を指導し、一部（つまり三浦を含んで）の者から反感を受けたことが記されている。また、3名の者が気候が合わなかったため病死している。

なものであった。第二に、「正しく営利して日本の伝道に便し」という目的を持っていたが、その動機は全体として「神に対する謝恩」であるとして、信仰とそれに基づく伝道の実践、およびその表現の場としての経済行為という基本構造をもっており、この信仰と商売の間に、矛盾も破綻もなかった。

したがって、日常的商売の成績に倫理的に対応し、「謝恩」の信仰の程度が、営業成績に影響するという傾向を持ち、このような使命観が南洋商会の成長のエネルギーであり、それゆえに現実主義的合理的な傾向も強い。

また堤林は、異教徒の信仰に対しては極端に無関心ないし蔑視という態度を持っていた。矢野は、「神」を強く意識した堤林が、他の「南進」した日本人と同程度に「日本」を強く意識し、それが、宗教的信仰の上に「南進論」的発想を築いており、信仰の希薄化の形跡はないと述べている。⁹⁵⁾

堤林におけるキリスト教信仰は、前述したように直観的観念的な信仰で、自らと他者を厳しく律する倫理であり、信仰的なエトスによって現実に関わってゆくものであったといえよう。

堤林は、植村に出合ってキリスト教に入信する以前に、読書にふけり、断食をしたり、山に籠って水垢離をとったこともあり、晩年には禅に傾倒し、曹洞宗大本山鶴見総持寺をよく訪れ、戒名もこの寺からもらった。⁹⁶⁾ このように堤林は、人生のある一時期にキリスト教と出会い、そして去っていった人間である。堤林は、自らの人生を摸索し、求道的な一生を送ったが、しかし彼の信仰は、キリスト教でなければならないという必然性はなく、ある時期にキリスト教に触れたのであり、その基底には、神秘的な宗教の希求があったのである。堤林自身は南洋商会の設立を神からの召命と信じ、それゆえに同志的結合を計って、厳しく青年を指導した。

三浦は牧師家庭に育ち、しかも、自分の父や母の仕事の使命の重さを知り、経済的に父の伝道を支援したいということを願って「南進」したキリスト者であり、両親や自らの信仰を疑うことはなかった。

この二人の内に積み上げられてきたキリスト教理解の仕方の相違が、いわば分派を作るようにして、三浦をして南洋商会を離脱させたのではないだろうか。

堤林は、三浦の脱会について次のように記している。三浦と、同時に脱退した坂本の両者に対して「予は充分に之れを導く力なかりし事遺憾とせると共に、多少青年の意気の冷静なる能はざる点あるに依り、今尚ほ全き一致を見る能はざる事を遺憾とす。然れど予は年月と共に其の一致を期待したるものなり。」さらにまた「亡びつつある三浦、坂本」と書き、三浦について

95) 矢野暢「前掲論文」pp. 308-332.

96) 矢野暢『前掲書』pp. 91, 97.

「世辞の巧になりし事酒を呑む事大言壮図を軽く話す事信仰の落ち行く様見へて之を悲しむ」と書いている。⁹⁷⁾

ともあれ三浦たち5名は、スマランに着いて約半年後の明治42年12月に南洋商会を脱退した。⁹⁸⁾

南洋商会は三浦たちの脱会後大幅な組織の変更をおこなった。⁹⁹⁾ それは残された青年達の要求でもあったが、設立の趣旨であるキリスト教の看板を降ろし、堤林は、自らを雇用者、経営者として、青年達は使用人という立場になった。そして、第二次、第三次の商會員を増員し、¹⁰⁰⁾ 大正7年頃には社員127名位まで増え、華南銀行、南洋倉庫を設立するなど成長した。¹⁰¹⁾ 南洋商会の大正10年の株主名簿には、富士見町教会長老の福島友雄の名前も見える。¹⁰²⁾ 財閥系商社ではない南洋商会が、明治末期以来はたした功績には多大なものがある。それは日本の南進を、近代的商法によってはたした。しかしその最盛期は大正7,8年頃で、それ以後世界的不況と農園経営の失敗のため、昭和3年に南洋商会は解散した。解散した時の堤林の訓示には、次のように述べられている。「……熱烈なる愛国の諸君は海外にあっても祖国日本に対しては至情をささげ、諸君の子弟もこの土地に生まれても立派な日本人であることを忘れさせないために、常に祖国の光輝ある二千六百年の歴史を研究し、神聖なる国体と皇室の尊嚴に絶対の信仰をささげ……(傍点筆者)。¹⁰³⁾」ここよりすれば堤林の生き方の基軸にキリスト教は関わりがなく、したがって南洋商会の設立当初の「商売と伝道」という目的は貫徹されなかった。

II-3. 南洋生活

南洋商会を脱退した三浦は、南洋の各地を流浪した。三浦が戦争中に書き残した「履歴書」¹⁰⁴⁾には「明治42年12月、同志5名と南洋商会脱会、後バリ Bali ロンボック Lombok スラバヤ Surabaya 各島を視察」となっており、この期間の詳しい正確なことはいっさい判明しない。ただ、それに続いて「大正1年12月、セレベス Celebes 島マカッサル Makassar に移り、同地に雑貨、小売業を開業」となっている。この商売を1人でやったのか複数でやった

97) 矢野暢「前掲論文」pp. 322-324, および堤林数衛の『日記』明治3年8月13日。この時、堤林は病気のため遺言を書いた。矢野暢の指摘によれば、三浦は南洋商会を脱会したけれども、当時全く堤林と接触を断ったのではなかったという。

98) 矢野暢の指摘によれば、この5人は三浦、坂本、長谷、阿(安)部、富増である。そのうち南洋に留まったのは三浦、坂本の2名で、その他3名は帰国した(矢野暢「前掲論文」p.322.)。

99) 堤林『…苦心談』p.17.

100) 大場条太郎とのインタビュー。1976年8月20日、新庄。この第二次以後、会員はクリスチャンであることは全く条件にならなかった。

101) 『山形県史』拓殖篇、巖南堂、1971年、p.914.

102) 『同上書』p.920.

103) 『同上書』p.922.

104) 表1参照のこと。

のかも不明である。そして、大正5年には日本に帰国し、目沢民子と結婚した。¹⁰⁵⁾ 司式は父宗三郎であった。それから推察すると、順風満帆ではないにせよ、妻を迎えることのできる精神的経済的状态に向かいつつあったのではないだろうか。三浦は27歳になっていた。

大正7年2月に彼は鶴間春二と共同出資で「日印貿易商会」を開業した。商会の設立は大正5年12月である。1921年『南洋年鑑』によると、日印貿易商会は本店をセレベス島マカッサルに置き、4カ所に支店および出張所を持ち、業務内容は、南洋における通商貿易、栽培漁業、製油、採鉱造船となっている。株は2万4千株、資本金120万円、うち払込額60万円弱である。この規模は、他の個人日本人商社と比較して特に大きくはなく、ほぼ中型規模である。共同経営の鶴間春二との出会いがどのようなものであったのか、現在確定しうる資料はない。資本金の60万円がどのように出資され、三浦がどの程度出資したのかも不明である。いずれにせよ、南洋商会以降のごく初期を除き、南洋浪人として落ち込んではいかず、一定の地位を築きつつあったのは事実である。日印貿易商会は、第一次世界大戦後の好景気を背景に、順調に経営を伸ばしていったものと思われる。¹⁰⁶⁾ 三浦は、セレベス島マカッサル日本人会（会員数140名、うち男118名）の理事になった。¹⁰⁷⁾ この時期が三浦にとっていわゆる実業家として最も順調な時期であった。しかし、この順調さも長くはなく、共同経営者鶴間春二が、たまたま三浦の帰国中、大正14年頃、マカッサルで強盗に襲われ、資金を奪われて殺害されたことにより、日印貿易商会は解散した。¹⁰⁸⁾

その後、三浦はマカッサルから奥地へ入ったトラジャ Toraja で、岸将秀とコーヒー園の経営を開始した。岸が主に栽培等技術面を担当し、三浦は主に資金面を担当したといわれる。¹⁰⁹⁾ 現地トラジャ人20人を雇った。¹¹⁰⁾

これより先、三浦の妻民子は、過労が原因で死亡した。¹¹¹⁾ 残されたのは、大正6年に生まれた長男俊雄、10年生まれの長女裕子、13年生まれの子女道子であった。¹¹²⁾

105) 三浦民子「母上の寛大と信仰の感化」三浦懿美編『三浦恵子』pp. 79-80.

106) この時には、日印貿易商会が専用の貨物船を購入しようという話があったというほどである。原彰とのインタビュー。1976年7月20日、姫路。また、埼玉県大宮に、兄懿美と語って地所数千坪を購入した。後、軍が接収し手放した。原シズ『前掲書』p.17. また、機会あるごとに病気であった母に金品を送っている。

107) 『南洋年鑑』第四回、日南公司、1921年、p. 53.

108) 石居太楼「前掲論文」p.37. および原シズとのインタビュー。1976年7月20日、姫路。なお、表1参照。

109) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日、仙台。

110) 台湾総督官房調査室『南洋各地邦人栽培企業要覧』昭和4年調査によれば、このコーヒー園は、バルupp珈琲園 Baroeppoe Koffieonderneming と称し、名義人岸将秀、共同出資三浦裏で、主作物は珈琲、試作物は茶、規那其他、果樹となっており、情況として「本園は海拔2000米に達し、氣候極めて温和にして、専ら温帯植物の養殖に適するを以て、現在養豚、養魚、養鶏の副産業を行ひ」とある。

111) 原シズ『前掲書』p.15.

112) 三浦家よりの私あての書簡。1976年10月30日。

そして昭和3年3月に三浦は、仙台の尚絅女学校舎監をしていた祖母内田はまの紹介で、尚絅女学校出身で、同校で教師をしていた横山しげと再婚した。結婚式は、仙台外記丁教会であった。¹¹³⁾

マカッサルにはオランダ人宣教師が居たが、三浦一家は多忙と遠隔のため日曜日に教会に行き礼拝を守ることが困難であった。しかし日曜日には、山奥のコーヒー園で家族と共に聖書を読み讃美歌を歌った。教会の礼拝に出席できるのは3カ月に1度くらいであった。¹¹⁴⁾ 子供達の教育は、仙台の祖母から教科書を送ってもらい、しげが教えた。三浦は、そのような育児、家事に口を出すことはなかった。しかし、子供好きであり、陽気でもあり、仕事の悩みを家庭の中に持ち込むことはなかった。¹¹⁵⁾

しかし昭和5年11月に、このコーヒー園は、世界的不況のあおりを受けて大失敗し、苦勞して日本から持っていったオルガンをはじめ、いっさいの家財道具を山中に捨て¹¹⁶⁾ バリ島へ移った。

バリ島デンパッサル Denpasar に落ちついた三浦は、従来の手広い事業から一転し、たった一人で自転車の修理業を始めた。タイヤがパンクした箇所をゴムを吹きつけるのである。¹¹⁷⁾ 昭和5,6年頃には、バリには日本人は三浦を含め3家族しか定住しておらず、デンパッサルには、三浦家しかいなかった。¹¹⁸⁾ 三浦は、40を過ぎて自らが手広くやる事業が得手でないと判断したのだろうか、細々と地味に、毎日自宅で仕事をした。¹¹⁹⁾ そして昭和8年には、子供達の教育のために、4女の出産を機に、家族を全員仙台に送りかえした。

三浦の家は、表が店で裏が住宅になっていた。¹²⁰⁾ この頃の写真を見ると、自転車修理という汚れる仕事であり、熱帯であるにもかかわらず、きちんとネクタイを締めている。

三浦は、煙草は吸ったが酒は飲まなかった。全く日本人のいない生活環境の中で、地味に細細と「自転車屋のオヤジ」として生きた。そのうち南方で食いつめた南洋浪人であった宮本、芝という2人の人物を雇うことになり、支店を出した。¹²¹⁾ そして、ある人の紹介で宮田自転車

113) 三浦家よりの書簡。1976年10月30日。

114) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日，仙台。

115) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日，仙台。ひじょうに子煩悩で、子供の求めには何でも応じたという。また日常的には質素節約をやかましくいわれたと述懐している。

116) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日，仙台。

117) 大場条太郎とのインタビュー。1976年8月20日，新庄。大場は、商用でバリ島に行くと必ず三浦を訪れたと証言した。

118) 大場条太郎とのインタビュー，および三浦しげとのインタビュー。三浦たち一家より先に住んでいた日本人については食い違いがあるが、3家族という数字は一致している。

119) タイヤ修理をやる日本人は多くはなかった。日本人修理業者は、都会から地方都市に広まり、器用な日本人は技術で信用を得て、支那人同業者は、日本人の後塵を拝したという。石橋好信「自動車用タイヤ修理および販売に活用した邦人」『ジャガタラ閑話』p.238。

120) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日，仙台。

121) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日，仙台。支店を出したのはブレレン Buleleng，クルンクン Klungkung である。

のパーソン号を輸入するようになり、¹²²⁾ 若干経営規模は拡大された。しかし、それも実業家としての野心を満たすというものではなく、細々としたつつましいものであった。

このバリ島での生活が、その後の太平洋戦争突入後の三浦に大きな意味をもつ。三浦は、典型的な「トコ・ジュパン」¹²³⁾ として、自らの店を経営した。堤林の、「永く永住し、住民を愛し、住民から信頼され、住民の中に溶け込む」¹²⁴⁾ という主張は、三浦によって具体化した。一つのエピソードをあげるとすれば、遠方の村人が夜帰宅するとき、三浦は無償でその未知の村人に自転車を貸与して帰らせたという。¹²⁵⁾

このようにして三浦は、最初に流通の仲介としての貿易業、次いで商品の生産としてのコーヒー園経営、最後に流通の末端としての小売業、修理業を営み、住民にとってきわめて身近な仕事をした。したがって、これによって大きく利益を得ることはなかったが、自転車業が住民の需要と合致したこともあり、また景気にも天候にも比較的影響されなかったため、その生活は安定していた。

三浦は、渡南以来、その場所や仕事の関係で、いわゆる教会生活を送ることはなかった。しかし、三浦は讃美歌を好み、1年ないし1年半に1度帰国する度に母から聖書を1冊ずつもらったりした。¹²⁶⁾ 三浦にとって、この母からの聖書は大きな心の支えであった。

このようにして、三浦のバリ島での生活は続けられたが、バリ島を訪れ三浦に世話になった高見順は、その日記¹²⁷⁾ の中で次のように書いている。「(高見は、) 三浦をたよってバリに来(た。)」¹²⁸⁾ それは三浦が、バリ島で日本人としての知名人であったという事実を示す。「三浦のコレクションに驚く。」¹²⁹⁾ 三浦は、古美術、とりわけバリ島の古美術と、世界の切手の収集を唯一の趣味としていた。しかも頑迷に自らの手元に置いて鑑賞するというより、よく知人にプレゼントしたという。¹³⁰⁾ 三浦は仕事で忙しく、もっぱら三浦自転車店の支配人をしていた

122) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日、仙台。

123) 矢野は「南進」と「南方関与」というタームを使い分けている。「南進」は国家政策的なもの、「南方関与」は、いわば「無告の民」の流出で、彼らの生態を分析して、「善意の南進」とし、「トコ・ジュパン」は「南方関与」であるとしている(矢野暢『前掲書』参照)。

124) 堤林数衛「海外発展に必須なる永住心」『販売所百言目次』第一章三項。ここで堤林は、日本人の海外発展の欠点が永住心を欠くことにあり、われわれはそうではなく、その土地に王国を築くまで幾代にても押し進む決心を持ち、その土地に家庭を作り、家を建て、地を求めて土着せよと述べている。しかし堤林自身は後帰国し、郷里山形県新庄に豪邸を建てて故郷に錦をかざった。

125) 藤岡保夫とのインタビュー。1977年1月20日、広島。このような事実は、列举のいとまがないほど多い。

126) 三浦襄「小合碩運寺に居られし頃の事ども」『三浦恵子』pp. 117-118.

127) 高見順『高見順日記』第1巻、勁草書房、昭和49年。高見順は昭和16年3月6日から3月末までバリ島を訪れた。

128) 『同上書』p.153.

129) 『同上書』p.157.

130) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日、仙台。および鈴木太郎とのインタビュー。1977年5月10日、横浜。

芝が高見の接待をした。高見は、ホテルが満員だったのでずっと三浦の家に滞在したのである。高見の日記によれば、この昭和16年頃の三浦は、商売の基礎も固まり、安定した生活をしていただようである。日露戦争以来日本人は、オランダが宗主国であるこの蘭領東印度において華僑らは二等国民であるとして入れなかったサロン等に、欧米人と共に一等国民であるとして入れたという。¹³¹⁾ そして三浦は、バリ島に定住した最初期の日本人であり、経済的にも社会的にも非の打ちどころのない位置におり、そのうえバリ人の生活に密着した自転車業を営み、ある場合には計算抜きで仕事をするようなパーソナリティであったがゆえに、名実共にバリの日本人を代表する存在になっていたのである。

III 日本軍政下における三浦襄

III-1. 日本軍政下のバリ島

明治以来、日本帝国は中国大陸北部をその国防上、経済上の生命線と考え、その延長線上に満州国をとらえ、自己の権益を守るため15年戦争を開始したが、その補給線は延び切り、武漢三鎮の占領以後は全く膠着状態であった。この行き詰りと米英との利害対立は、日米通商条約の破棄となり、その結果、南方地域の豊富な原料物資の確保が緊急の課題となった。昭和15年9月からの第二次日蘭会商は、このような背景のもとで行なわれたが、9カ月の交渉の後それは決裂し、連合国のA B C Dラインはますます日本の南進を警戒し、ついに16年7月に蘭領東印度総督府は、日本資産の凍結を断行した。同時に日本は宥和政策から軍事政策に転換し、9月には東インド進攻計画¹³²⁾を発表し、南方在留邦人8千名の名簿作製にかかるなど、将来の「南方占領」に備えた基礎的作業を行なった。¹³³⁾

当初日本軍はバリ島に進攻する計画はなかった。しかしジャワ進攻作戦が立てられたとき、バリ島に米豪の支援を遮断するのに有効な飛行機があるために作戦計画に編入された。¹³⁴⁾

太平洋戦争突入後間もない昭和17年2月19日、陸軍第48師団金村大佐の指揮する上陸部隊はバリ島に無血上陸し、直ちに軍政を施行した。¹³⁵⁾ しかしバリ島は、開戦直前の16年11月の「占領地軍政実施に関する陸海軍中央協定」によって海軍の軍政地域となっており、海軍第21根拠地隊堀内隊が金村隊と交替した。¹³⁶⁾ この時は、根拠地隊司令部が軍政を掌握したが、セレベス

131) 大場条太郎とのインタビュー。1976年8月20日、新庄。

132) 服部卓四郎『大東亜戦争全史』第2巻、原書房、1965年、p.120.

133) 後藤乾一『火の海の墓標—ある<アジア主義者>の流転と帰結』時事通信社、昭和52年、p.106.

134) 防衛庁戦史資料調査室『戦史叢書、蘭印進攻作戦』朝雲新聞社、1969年、p.81.

135) 『同上書』p.323.

136) インドネシア地域はマレー、スマトラを陸軍第25軍、ジャワを第16軍、セレベス、モルッカ、小スンダ列島、ニューギニア、蘭領ボルネオを海軍南遣艦隊が統治するというように分割され、それぞれの軍攻のシステムが異なっていた。ジョージ・S. カナヘレ、後藤乾一ほか訳『日本軍政とインドネシア独立』鳳書房、昭和52年、p.64. (以下、本書をカナヘレ『インドネシア独立』と略す。)

島マカッサルに海軍民政府ができ、17年8月以後、その下部組織セラム民政部が軍政を担当し、実戦部隊は作戦に専念することになった。¹³⁷⁾

上陸直後、日本側とバリ側との会談が行なわれた。日本側は陸軍金村部隊長ほか数名の将校で、通訳として三浦があたり、バリ側はデンパッサルのラジャ Radja,¹³⁸⁾ プジャ I Goesti Kctoet Poedja, スランガン書記 I Poetoe Serangan¹³⁹⁾ であった。この会談で、日本が直ちに軍政を施行すること、また各ラジャ¹⁴⁰⁾ を通して、オランダ統治時代の組織による間接統治を決定した。¹⁴¹⁾

ジャワでは、日本軍は解放軍として熱狂的に歓迎された¹⁴²⁾ が、日本軍は、ジャワ島住民に民族旗の掲揚と民族歌インドネシア・ラヤを歌うことを禁じた。独立問題に関することは厳重にチェックされていたのである。しかし一方では、自らを解放軍として提示し、3A運動（アジアの光日本、アジアの母体日本、アジアの指導者日本）を展開した。¹⁴³⁾ ところがバリ島では多くの住民が住居を捨てて山に逃れたといわれる。¹⁴⁴⁾

バリ島はヒンズー教が強いところであり、ヒンズー文化による宗教法、慣習法が生きてはいるが、根底にはバリ島本来の慣習法がより深く根付いていた。¹⁴⁵⁾ そしてその村落共同体の結合

137) 岸幸一・西嶋重忠編著『インドネシアにおける日本軍政の研究』紀伊国屋書店、昭和34年、p.115。(以下、本書を岸『軍政の研究』と略す。)

138) 王侯の意。デンパッサルを支配する伝統的貴族である。

139) 稗方豊彦「三浦先生と陸軍上陸部隊」『Bali』第3号、故三浦襄翁追悼特集号、昭和27年、p.32。本書は、戦争前・中にバリ島にいた日本人の友好団体で、1977年現在も活動しているバリ会が発行したものである。このバリ会に対応して、バリ島にバリ日本会があるという。本書は、日本人の習いとして故人を讃える傾向があることは否めないながらも、戦争中の三浦に関して、三浦の『日記』と並んで最も貴重な証言集である。特に、日本の敗戦直後バリ島でも日本軍に対する反乱が若干起こったが、そのような時期に書かれたインドネシア人の三浦に関する記述は興味深い。

140) ラジャはオランダの間接統治の時代には、慣習法上の首長であった。その権威は絶対的なもので、ラジャの前では、一般のバリ人は膝をついて進まねばならなかった。越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」『月刊インドネシア』第118号、日本インドネシア協会、昭和32年。

141) 日本軍は、大陸で日本流の直接統治を施行しようとしたが失敗した。それゆえ、昭和16年11月「南方占領地行政実施要領」の基本方針の第一条に、「極力残存統治機構を利用し、従来の組織、及び民族的慣行を尊重すること」と定めた。岸『軍政の研究』p.112。

142) インドネシア人は、オランダの築いたバリケードを取り除いて日本軍を解放軍としてその前進を助けた。それは第16軍今村均中將にしてみれば、大陸での苦戦のあとただただにその印象は強烈で、インドネシア人に対する態度を左右する大きな要因であったといわれている。カナヘレ『インドネシア独立』p.35。しかし、それ以上に大きく作用したのは、インドネシアにはジョヨボヨ Djojobojo 神話があったからである。それはジャワにあった伝説で、北の世界の黄色民族が、いつかは白人の大君主を追い出し、短期間—とうもろこしが育つ季節のあいだ—この地を支配し、そのあとで正義の女神により祝福される治世がくるというものであった。日本がロシアを破って以来、この予言は真実味をいっそうました。カナヘレ『インドネシア独立』pp.3-4。

143) 3A運動については、岸『軍政の研究』pp.329-335参照。

144) スランガン『Bali』第3号、p.41。

145) インドネシアは一般に回教国であるが、バリ島では独自のバリ・ヒンズーが信仰されていた。岸『軍政の研究』p.65。

には、共通の母祖また父祖に由来する子孫であるという血縁地縁関係が作用しており、¹⁴⁶⁾このような環境の中では、ジャワ島で展開された民族主義運動の影響は浸透しなかった。そしてその血縁地縁社会にあって、生え抜きの血縁集団が上層を占めていた。¹⁴⁷⁾ ラジャは、八つの理事州の長として軍政に協力した。¹⁴⁸⁾

軍政開始直後の混乱が一定程度おさまると、バリ島では日本語教育が開始されたり、¹⁴⁹⁾各地の郵便局、銀行、質屋等が調べられて重要物質が押収され、各帳簿（出入金関係）やキニーネ、阿片の残量が調べられた。¹⁵⁰⁾ また、占領軍現地自活¹⁵¹⁾の方針によって牛、豚の軍隊への供出なども開始された。¹⁵²⁾

バリ島で、軍の機構を通じて集められた余剰米は、近接地区に提供した。¹⁵³⁾そして、全く未発達工業化も軍によって促進された。¹⁵⁴⁾ 18年10月には、バリ畜産会が設立され、全バリ島から集荷された牛、豚は食肉として台湾畜産興業などに出荷された。¹⁵⁵⁾そして新たに三浦が設立した三浦商会は、牛や豚の骨で歯ブラシ、釘等の製造を開始した。¹⁵⁶⁾

戦局が日本側に不利になり、南東太平洋における戦闘が西漸すると、セラム民政部は、18年2月に小スンダ列島の民政担当に変更され、小スンダ民政部に改組されてバリ島に移った。¹⁵⁷⁾ 具体的な作戦区域に入らなかったインドネシア地域の日本軍は、次々に他の作戦区域に移出され、防衛に支障をきたすようになった。また、18年5月には、日本政府はビルマ、フィリピンの独立を許容し、マレー、インドネシアの日本領土編入を決定した。¹⁵⁸⁾ インドネシアの独立を望んで日本軍に協力してきたスカルノら民族主義者は、これに大きな失望を抱いた。その不満を解消するため、日本政府は、政治参与の制度を約束し、¹⁵⁹⁾ バリ島には小スン

146) 岸『軍政の研究』p.68.

147) 『同上書』p.71.

148) カナヘレ『インドネシア独立』p.107. その八つの理事州は、ブレレン Buleleng, スガラ Negara, タバナン Tabanan, バトゥアン Batuan, ギャニアル Gianyar, クルンクン Klungkung, バンリ Bangli, カランアサム Karangasam である。

149) 三浦襄『日記』昭和17年3月10日。しかし、岸『軍政の研究』p.217によれば、軍政を総覧する軍政監部で日本語教育を開始したのは、18年11月以降のこととなっている。バリ島独自の日本語教育だったのだろうか。『日記』については、脚注174)を参照のこと。

150) 三浦襄『日記』昭和17年3月8日。

151) 「南方占領地行政実施要領」の三項には「国防資源の獲得と、占領軍の現地自活のため、住民に加えなければならない重圧は、この目的に反しない限度に止めること」とある。岸『軍政の研究』p.112.

152) セラム民政部農林水産課『セラム民政部管内農林水産雑観雑見』昭和18年12月1日。

153) 岸『軍政の研究』pp.375, 378.

154) 『同上書』p.290.

155) セラム民政部農林水産課『前掲文書』

156) 越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」『月刊インドネシア』第118号, p.7.

157) 岸『軍政の研究』p.161.

158) これは大本営政府連絡会議で決定され、5月31日の御前会議で正式に採択された。

159) 岸『軍政の研究』pp.354-355.

ダ州会が設置された。¹⁶⁰⁾

以上の事柄を背景として、19年2月にはバリ島にも郷土防衛軍が設立された。¹⁶¹⁾ 19年になると労務者の供出が行なわれ、小スンダ民政部は、バリ島から6千名を勤労義勇隊の名のもとに島外に送り出した。¹⁶²⁾

このように住民が日本軍の占領によって大きく抑圧されてくると、スカルノら民族主義者の独立要求はますます激しくなったので、この年の9月7日に、「東インド」の将来の独立を許容する小磯声明¹⁶³⁾が出されたが、これには独立の時期は明確にされていなかった。しかし、これを受けてスカルノは、20年4月には、民族的自覚を促すためにバリ島に来た。¹⁶⁴⁾

ジャワ島でインドネシア人と日本人からなる独立準備調査会¹⁶⁵⁾が設立され、20年5月28日に第1回の会議が招集された。この会議はスカルノのパンチャシラ Pantja Sila (建国五原則)¹⁶⁶⁾を採択した。さらに6月末には民衆勢力の結集を目指して、新大衆組織「建国同志会」が設立された。¹⁶⁷⁾ バリ島に小スンダ建国同志会ができたのは、日本の敗戦の直前、8月11日のことであった。この中に唯一の日本人として参加したのみならず、本部次長に就任したのが三浦であった。¹⁶⁸⁾

インドネシアの独立は、20年7月17日の最高戦争指導会議によって、小磯声明からちょうど1年目の20年9月7日に決定された。¹⁶⁹⁾ そして、この日の末明、三浦はデンパッサルの自宅でピストル自殺をした。

160) 政治参与の制度が発表されたのは18年9月5日であったが、バリ島で第1回小スンダ州会が開かれたのは8カ月後の19年5月のことである。海軍軍政地域は、このような動きに積極的ではなかった。

161) カナヘレ『インドネシア独立』p.199.

162) 岸『軍政の研究』p.317.

163) 第85特別帝国議会において小磯首相は、その施政方針演説の中で、「次ニ、東『インド』ニ於キマシテハ、帝国ハ昨年原住民ノ念願ニ基キ、其ノ政治参与ニ関スル措置ヲ執ッテ参ッタノデアリマスガ、此ノ間ニ是等各地ノ原住民ハ克ク帝国ノ真意ヲ解シ、終始一貫大東亜戦争完遂ノ為メ多大ノ努力ヲ続ケテ参ッタノデアリマシテ、現地軍政ニ対スル協力亦洵ニ見ルベキモノガアリマス。此ノ実情ニ鑑ミマシテ、帝国ハ東『インド』民族永遠ノ福祉ヲ確保スル為メ、将来其ノ独立ヲ認メントスルモノナルコト茲ニ声明スルモノデアリマス」岸『軍政の研究』p.405. しかしここで「インドネシア」ではなく、東「インド」と呼ばれていることに注目したい。

164) カナヘレ『インドネシア独立』p.315.

165) インドネシア軍政は三つの地域に分割され、インドネシア人の行政能力、組織が整備されていないという理由で、小磯声明は、とりわけ海軍地域で積極的には受け入れられなかった。小磯声明を受けて、20年3月10日(1)独立準備調査会の設備、(2)建国学院の創立、(3)言論の自由制限の緩和の3政策が発表された。この間、6カ月もかかっていることに注意したい。

166) 建国五原則と呼ばれ、民族主義、国際主義、民主主義、社会主義、神への信仰をその原則とした。詳細は、カナヘレ『インドネシア独立』p.292以下を参照のこと。

167) これは独立準備調査会が独立準備のため、指導者スカルノ、ハッタが海軍地区の実情視察をした結果、海軍地域の民衆にも独立運動への参加が熱望され、海軍民政府が案出したものであった。

168) 越野菊雄「三浦氏を懐う」『Bali』第3号、p.9.

169) 「同上論文」p.9.

Ⅲ-2. バリ島の三浦襄

太平洋戦争に突入する前のインドネシアにおける日本人の一般的印象は、「子供たちと遊ぶのが好きな町の写真屋さん」であり、「安物を売っている愛想のいい店の主人」というイメージであった。¹⁷⁰⁾ そしてこのイメージは三浦にもあてはまる。三浦のニックネームは（自転車屋の御老人）¹⁷¹⁾ であり、「トコ・スペダ Toko Sepada のトアン・ジュパン Tuan Djepang（自転車屋の日本人のおじさんの意）」¹⁷²⁾ であった。

三浦は、昭和16年7月には日本に帰っていた。¹⁷³⁾ したがってこの三浦の帰国中に蘭印総督府の日本資産凍結があり、この第二次日蘭会商の推移が、彼に帰国の決意を促したと思われる。

三浦は17年1月25日に召集を受け、東京の軍令部に出頭を命じられた。彼は飛行機で福岡、上海、台北を経てダバオに2月7日に着き、輸送船でマカッサルに到着した。そして陸軍第48師団金村隊の随員として、バリ島サヌール Sanur 海岸に2月19日未明に上陸した。¹⁷⁴⁾ 占領作戦は2月末に完了したが、バリ島住民は大混乱を起こした。¹⁷⁵⁾

三浦の最初の仕事は、「サヌール海岸地図」「デンパッサル市内図」「クータ Kuta 飛行場図」「抗日分子一覧表」を作製し、各部隊に配布することであった。¹⁷⁶⁾ 次いでラジャ、ポンガワ Ponggawa を集めて太平洋戦争の意義を通訳し、また自らも演説して「日本の真意」を伝えた。¹⁷⁷⁾ この「真意」とは、日本はインドネシアよりオランダを駆逐し、その解放者として来た

170) カナヘレ『インドネシア独立』p.37.

171) スランガン『Bali』第3号, p.41.

172) イマデスレゴ Imadeseregog『Bali』第3号, p.42. たいへん親切なことで有名であり、人が修理を頼むと、三浦商店の自転車でも部品等を必ずサービスしてくれたと述べている。

173) 表1参照。

174) 三浦襄『日記』による。三浦は召集を受けた昭和17年1月26日から、一時帰国して戦火の中を再びバリ島に出発した19年11月23日まで刻明に日記をつけた。三浦に関して、「第二南遣嘱託履歴」表1と共に現存する最も貴重な原資料である。その記述は行動の経過であり、彼の精神、思想を表明している部分は極度に少ない。その行動の記録も具体的でありすぎるため、例えば会議があったという記述があっても、それが何のための会議で何が決定されたのかという事実が不明確である。したがって、全体的な日本軍政、海軍軍政史の動きから類推するしかない。しかし、三浦の人間性はかえってそのような日常的な中でより明確になる。丹念に日記を読むと、三浦がいかにバリ人を愛し、それゆえに叱ったかという事実や、三浦がひきとって養育していた子供の死に涙するなど、日常的な中でこそ三浦の人間性が浮き彫りにされる。「南方占領地行政実施要領」のp.8には「作戦の開始後新たに進出すべき邦人は、事前にその素質につき厳選するが、以前の南方在住者で帰国していた者の再渡航については優先的に考慮すること」とある。三浦の身分は「部内限奏任官待遇、年額1800円」であった。これは大尉の位置に相当する。

175) 日本軍占領直後、三浦のもとに多くの住民が陳情にきた。その多くは日本軍が貴金属、家具などを掠奪したことなどであった。スランガン『Bali』第3号, p.42.

176) 稗方豊彦「三浦先生と陸軍上陸部隊」『Bali』第3号, p.29.

177) 三浦襄『日記』昭和17年2月21日。しかし、日本の「真意」はけっしてそのようなものではなく、「南方占領地行政実施要領」七項には、「原住民に対しては、日本軍に対する信仰観念を助長するよう指導し、その独立運動は過早に誘発せしめないこと」とし、インドネシアに対して独立問題や自治問題についてはいっさい触れないようにした。ジャワでは、上陸してきた日本軍に対して、インドネシア側からインドネシアの閣僚名簿が提出されたほどであったが、日本軍はこれを黙殺した。

のだという意味である。彼はこのような宣撫工作に従事すると共に、海軍主計官と共に、銀行、郵便局、質屋を調べ、不正隠匿物資の摘発や、預金残高、入出金帳簿の調査をし、また重要物資であるキニーネ、阿片の残量調査をしたりした。

17年3月29日の三浦の日記には、この頃の生活の実態がよく集約されている。

「この日こそは、2月19日夜半、サヌール上陸以来、始めての日曜日をせん（休日という意味か、筆者注）と、数日前よりプジャ、バンジャル等とブドゴールに赴く事を約束し居り処、早朝、ポンガワ、ケシマン、バンジャル蒼皇として自動車にて来り、一大事出体と云ふ。聞けばバトブランの土民数百名、本日日本兵ラジャと共にバドブランに来ると聞いて恐れをなして、ケシマンに逃れ来りと云ふ。隊長を訪問せしも生憎留守、中隊本部に赴き見して、兵は正にギャニヤルに赴きしと云ふ。急ぎケシマンに至り見れば、4百余名の土民群り居るを見る。カントル広（場、筆者注）に集合し、昨日ギャニヤル王と会せし事、税金い（文意不明、筆者注）出来るまで待つ事等を伝へ、バトブランに赴き暫く待つ内にプトラ、ラジャと兵ギャニヤルより来る。王子を説得して共にケシマンに赴き一同を説諭す。重立ちし者16名をギャニヤルに連れて行く事に成りしも、自分が共に行くに非ざれば行かずと云ふ。共にギャニヤルに赴く。中食を馳走に成りて、可及的罪を訪はざらん事をラジャに約して帰へる。夕方、ロンボク島より爪波（ジャワ、筆者注）バンドンに連れて行かれし日本人の土民家内（4名）子供8名ションブラナよりゾロゾロ来る。大変なり。梅谷、山下、玉井、三浦（初太郎）の家内連なりと云ふ。コト、父親と共に来り、銀貨紙幣（千百円なりと云う）を預けてくれと云ふ。困った事ながら受領書を渡して預かる。1昨日カミソリ紛失の件、其の他此の室をカキ廻せし者あり、預かり金でも紛失しては大変なりと案ず。夜自転車にて外出。スマデの家に立ち寄る。ゴブラの言で芝君をスラバヤにて見たる者あると云ふ。事実なる事を願ふ。トランク1ヶ貰ふ大に助かる。」

長い引用であるが、この日記は、バリ島上陸直後の混乱の中で、三浦がどのように行動し、バリ島社会の中で住民にとって、どのような存在であったかをよく表わしている。

この日記のいう「一大事」がどういう事件であったかを正確に判断することは、困難である。のち18年2月にギャニヤルの首長継承問題がこじれ、ギャニヤル王をロンボック島に隠居させて、長子が首長を継承して事件が解決するということが起こったが、¹⁷⁸⁾ その問題の伏線なのだろうか。ともあれ、支配力がオランダから日本へ移行する過程で、このようなバリ島の慣習をもちからみ込んだ問題に、正確に対処することができるのは、三浦以外になかったと思われる。

日本が連合軍と戦争を開始すると同時に、蘭領東印度に残留していた日本人は全員検挙さ

178) 清水重夫「三浦さんを懐う」『Bali』第3号、p.7.

れ、豪州の収容所に送られた。¹⁷⁹⁾ 三浦商店の従業員宮本、芝も収容所に送られ、三浦は彼らを案じていた。また、戦前のバリ島は漁業の根拠地でもあり、主に沖縄出身の日本人船員がバリ島でバリ人と結婚していたが、彼らも収容所に送られ、残された家族が三浦をたよって来て、その結果、三浦家は母子寮の様相を呈し、太郎、花子という日本人名で子供達を養育しはじめた。後に軍の司令官にこのことを知られ、軍から資金を出すというのを、「自分が勝手にやっているのだから」と固辞している。¹⁸⁰⁾ 非常に多忙な毎日であった。

この日記にも表われているが、彼は「土民」という用語を用いている。彼は、宮本や芝を雇い入れる際にも、彼らの「土人」同様に使ってほしいという懇願に対して、日本人なのだから、「土人」と同一視はできないという意味のことをのべている。¹⁸¹⁾ バリ島は、ジャワ島と共にインドネシアでは文化の高い地域といわれていた。そのバリ人に対して、三浦は、「土民」という概念を基底として接触していたのである。もっともすべての用語の使用を「土民」あるいは「土人」としたのではなく、ある場合では「バリ人」としていることもある。特にプジャ¹⁸²⁾に関しては、「ミスター・プジャ」としたり「プジャ君」としていることのほうが多い。

三浦は、「土民」という用語を用いることによって、どのような「バリ人」を意識していたのであろうか。三浦は当時、バリ人に対して完全な自治権、自主能力を認めてはおらず、したがって対等な関係とはとらえていなかった。彼は悪意の征服者ではなく、善意の兄としての日本人、アジアのよき指導者としての日本人という意識でいたのではないだろうか。三浦は、日本人のみならずバリ人からも「バリ人を愛した人」と言われた。事実、徹底的にバリ島に住み続け、バリ島とバリ人を愛したが、バリに同一化するのでは決してなかったといえる。したがって、たしかに「土民」として下に見ていたけれども、バリ人を搾取の対象として固定化しようとするものではなく、日本人として良き指導者であり、バリ人を向上させたいと考えていた。このことは、彼の「バリ畜産会」の設立に関して後述する。

17年5月に入って、三浦をセレベス島マカッサルに移そうという話が軍部に持ち上がったが、結局、三浦の存在はバリ島軍政にとって必要であるとの判断により、バリ島の第21根拠地隊司令部の要請で、第21根拠地隊司令部付きになった。これは、三浦自身にとっても好ま

179) 西嶋重忠『証言インドネシア独立革命—ある日本人革命家の半生』p. 102 以下を参照のこと。

180) 越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」『月刊インドネシア』第118号, p.7.

181) 三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日, 仙台。

182) イ・グスティ・クトゥット・プジャは、オランダの大学に留学し、メーステル Meester (法学士) の称号を持っていた。当時バリ島でメーステルの称号を持つ者は2人しかいなかったといわれる。プジャはメーステルの称号を有するがゆえに、弁護士の資格を持つ裁判官であったが、日本軍の上陸に際し、日本軍に協力し、民政部顧問となり、バリ島でインドネシア人として最も高い地位についた (月給 500 ギルダー)。後、19年7月17日に独立準備委員会が招集されたとき、小スンダ地区から唯一の代表として参加し、日本降伏後はスカルノ政権のもとで小スンダ州の初代知事となった。三浦とは親子ほど年が違っていたが、三浦はプジャの家を自分の家同様に使用する関係であった。

しい決定であった。¹⁸³⁾

そしてこの頃、高松宮、久邇宮などの皇族がバリ島を視察に来た。三浦は彼らの案内をしたが、彼はこのような仕事を非常な光栄と感じたようである。¹⁸⁴⁾

この頃、三浦は、民政部長官越野菊雄¹⁸⁵⁾の顧問となった。この頃の三浦の仕事は、(1)バリ島においても経済組織を掌握していた華僑を駆逐し、バリ人を各方面に登用し、自主的な経済組織を作り上げること、(2)各理事州の首長の監督、そして、(3)各首長に称号を用いることを許可し、(4)人頭税として悪評高かった道路税を撤廃するということであった。¹⁸⁶⁾

17年5月中旬には、バリから他の軍政地域への牛、豚の移出が計画され、三浦はこれに参画するようになった。これは各軍政地域における現地軍の自活を保障しようとするものである。民政部は、その関係局長、軍からは主計、三井農林社員、王侯連盟を招集して、5月14日から会議を開いた。¹⁸⁷⁾これは後に発展して「バリ畜産会」となったが、正式に発足したのは18年9月であった。この「バリ畜産会」は三浦の出資によって結成された。¹⁸⁸⁾業務内容は、島内から牛、豚、水牛を集荷し、それを台湾畜産興業およびジャワ島に出荷するというものであった。後に、それらを食品加工化したあとの残骸、つまり骨から歯ブラシ、釘の製造をするようになった。それが「三浦商会」である。¹⁸⁹⁾これらの業務は、三浦の考えによって、具体的実務いっさいがバリ人にまかされた。三浦はそれを監督し、軍に対して責任を負うという方法を採用した。¹⁹⁰⁾

ジャワ島に対し、外領と呼ばれた数多くのジャワ以外の地域は、「民度」が低いとされた。¹⁹¹⁾これが海軍地域の独立に対して軍が積極的でなかった理由であった。とりわけバリ島は、伝統的な貴族の支配力が強く、民族的自覚が乏しく、基本的には農業が主体で近代的経営や民族資本家、近代工業は育っていなかった。また、三浦が畜産会運営に関して、自分の考え通りにやれたということは、彼が軍と民政部にどのような形でコミットしていたかを伺わせる。前述したように、三浦はバリ人社会に同一化し、一バリ人になるのではなく、深い理解を

183) 三浦襄『日記』昭和17年5月2日。そのあと6月9日にもロンボック島に移そうという話が三浦とあったが、堀内司令官がバリ人が動揺するからというのでとりやめになったことがあった。

184) 三浦襄『日記』によれば、高松宮が来島したのは昭和17年5月4日、久邇宮が来島したのは同年6月17日である。

185) 越野が初代小スンダ民政部長官として赴任してきたのは昭和19年1月29日であるが、それ以前、昭和18年6月1日付をもって三浦は軍からの給与を返上し無給囑託となり、バリ畜産会からの給与200ギルダーだけとなったが、軍に対する仕事の性格は以前と変わることはなかった。

186) プジャ「三浦さんの印象」『Bali』第3号、p.38.

187) 三浦襄『日記』昭和17年5月14日。

188) セラム民政部農林水産課『前掲文書』昭和18年12月1日。

189) 『同上文書』

190) 越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」『月刊インドネシア』第118号、p.7.

191) 岸『軍政の研究』p.171.

持ってバリ人を愛した「日本人」であったのである。こういう思想に立つ三浦が、日本軍政にどういう対応をしたのかは、おのずから明らかであろう。

セラム民政部の出張所がバリ島シンガラジャ Singaradja に設立され、いちおう軍政組織が整備されると、三浦は民政部職員になることを要請された。しかし、三浦にとってそれは好ましいことではなかった。17年7月26日の日記には、「司令（堀内司令官、筆者注）より今後の所置（待遇、筆者注）に就いての相談あり。役人は辞退し、民政府顧問の位置にありて、自転車の一手輸入・畜産抛出の全権をと申述ぶ。小関参謀（スラバヤ在）もよく知って居る事でもあり、何とか成るであろう。先刻武内氏、司令に三浦を民政府員にする件を勧められし。」とある。

この三浦の希望は入れられ、三浦はバリ軍政に関して、民政府顧問として自由な立場に立つことになった。この三浦の位置は、三浦の活動にとって重要な意味がある。官僚的組織的な立場に固定化され、文字通り日本から来た存在としてバリ住民に君臨するのではなく、住民に対して開かれた存在として、軍と住民との相互理解のパイプ役となり、自由な発言が保証されることになったのである。

昭和18年6月1日から、三浦は無給の嘱託となり、畜産関係の仕事から収入を得ることになった。しかしながら、具体的な実務から離れたというのではなく、軍政に関して、民政部長官に様々な提言をしている。¹⁹²⁾さらに三浦は、デンパッサル病院長ウィルジョ・ミジョに次の様にのべている。「この病院にある薬はインドネシア住民のためだけのものだ。もし日本人が要求しても与える必要はない。」と。¹⁹³⁾

17年8月10日の三浦の53才の誕生日には次のように記している。「30余年間の南洋生活、此の間、父上母上祖母上等故人に成られた方々がどの位真心を込めた祈りを以って此の身の護りを神に念じて下さった事であろう。其の祈りが聞かれて我が日本帝国の領土となった此の地で思う存分働く事が出来た自分の幸福を考えると、感謝感激の念に燃ゆる次第である（傍点筆者）。」昭和17年8月の段階では、インドネシアは日本軍に占領され軍政が敷かれていたが、日本の領土ではなかった。前述したように、昭和18年5月に日本政府は、ビルマ、フィリピンの独立を決定したが、同時にインドネシアの帝国領土への編入を決定していた。¹⁹⁴⁾しかし、この事実は公表されてはいなかった。そこから見ると、三浦の日記の傍点部分は非常に大きな問題を含んでいる。

192) 三浦のところにはプジャをはじめ現地の主要な役人が集まり、三浦を囲んで夜が更けるまで語り合うことがよくあった。三浦は、どんなことでも何の遠慮もなしに真実をおちまけて越野に具申したという。バリ人にとって、三浦は心の「支え柱」であり、日本側にとっては「明かり窓」であったと述べている。越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」p.6.

193) ウィルジョ・ミジョ『Bali』第3号、p.40.

194) 敗戦後、連合軍総司令部の命令によって外務省が作成した文書「第二次世界大戦中ニ於ケル東印度ノ統治及帰属決定ニ関スル経緯概要」参照。

日本の真意は、インドネシアの原料物資を永久に確保すること、その安定供給のために帝国領土に編入することであった。先に三浦が演説した「日本の真意」は、アジア民衆を白人から解放する大東亜共栄圏建設の戦いをという意味であった。一軍属にすぎぬ三浦は、一人の日本人民衆としてそれを信じていた。三浦は、住民に対して信頼されるスピーカーであったゆえに、領土問題に関してはけっして軽々しく口に出すことはできなかったはずである。誕生日である程度感情が高ぶったにせよ、さきの傍点箇所は理解できぬ文章である。それは、三浦がそれ以後、インドネシアの独立のために全情熱を傾けて奔走したというコンテキストからも理解できぬ事柄である。

三浦はまた、悪税撤廃と日本人官吏のバリ人への対応の仕方について、バリ島を訪れた本庄茂大将（本庄繁大将のことか？筆者注）に苦言を呈している。¹⁹⁵⁾ また、日本軍の軍政も時間がたつにつれて横暴になり、官吏が住民を簡単に撲打したりし、また海軍の特別警備隊は、「トッケイ Tokkei」として恐れられたが、これらについても機会があるごとに、三浦は軍の上層部に上申した。¹⁹⁶⁾ 三浦の人となりは、身分階級にいっさいこだわらず、どのような高官がいても「やあ、こんにちは」といってずかずか部屋に入っていったという。また、バリ人給仕達に接する時も、いっさいその態度は変わらなかったという。¹⁹⁷⁾ そして酒席では、自らは酒は飲まず、サイダーを飲みながら、うまく座持ちをした。¹⁹⁸⁾

17年後半に入ると、三浦は過労のため体調の異変を訴えるようになり、ある時は1週間仕事を離れて山籠もりをしたり、1週間の絶食を試みたりして休養をしようとした。しかし徐々に三浦の体は衰弱していった。三浦は胃が弱く、よく下痢をした。これが昂じて、19年6月には半年の間、帰国静養することになるが、その徴候は17年当時すでに始まっていた。

18年2月に、セラム民政部は組織再編され、小スンダ民政部としてバリ島にやってきた。戦局の悪化は激しくなっていた。

18年6月の日記には、三浦の民政部農林水産課講習学校での講演の骨子がのべられている。「……主旨、和蘭バリ島侵略史、3千4百人死亡、日本軍バリ島進駐、無血占領、大東亜緒戦に於ける赫々たる戦果、英米ノ空宣伝、日露戦争、日本ノ発展、白人ニ勝ツ。日本精神、山口（山本五十六のことか？筆者注）提督ノ戦死、犠牲的精神、インドネシアは何ヲ以ッテ日本の大理想実現に協力スベキカ、今ハ建設ノ時代、犠牲ノ時代。親切、正直、公平、勤勉。此ノ

195) 三浦襄『日記』昭和17年11月2日。「…悪税を日本政府が徴する事、誠になげかわしき事、一般日本よりの官吏の原住民に対する不遜不親切に対し、強調して大将閣下に申述べる。…」

196) 三浦襄『日記』昭和18年3月12日。長官に対して警備隊があまりに行政に入り過ぎるという事実がかつてあったことを指摘している。

197) 藤岡保夫とのインタビュー。1977年2月20日、広島。藤岡は三井農林の社員で、バリ島で稲作改良の仕事をした。

198) 藤岡保夫とのインタビュー。1977年2月20日、広島。

講演前20分を利し、清水長官を訪れる。特警横暴、司令ニ伝達ヲ頼まる。金一封、無料囑託ニナルノダカラとて頂戴する（3百円）。」ここには、見事に、三浦の戦争観が語られている。

三浦のいうバリ島侵略史とはこうであった。バリ島がオランダによって侵略されたのは、1906年のバリ戦争によってである。この時、各ラジャは、一族、兵士と共に白装束を身にまとい、クリス（短剣）とトンバック（槍）を持ってオランダ軍に対して決死的攻撃を行ない玉碎した。¹⁹⁹⁾

このように、オランダがバリを侵略する時には、大きな犠牲が払われたが、日本が占領する時には無血であった。そして、「この戦争は、バリ島はもちろん、アジア10億の解放運動であり、それぞれの所を得せしめる戦いである。インドネシアは必ず日本軍の力で独立させるのだ。日本は決して嘘をいわない。」²⁰⁰⁾と三浦はのべ、かつて日本は、ロシアを破ることによって欧米の植民地化されていたアジアを覚醒させた。今やアジアの盟主日本の指導のもとに、アジアから欧米を駆逐し、民族の自立と解放を進めるという、文字通りの大東亜共栄圏という理解を持っていた。前述したように、日本の真の目的は、原料資源の永久確保であったが、一般宣伝としては、民族解放と自決が、いわば建前として語られていたのである。三浦はそれを素直に、徹底的に信じたのである。ではその大東亜の盟主日本は、バリ人に対してどのように振る舞うか。三浦は、今は犠牲の時代、産みの苦しみの時であるとし、バリ人たちによって尊敬され信頼されるために、親切、勤勉、正直等の倫理を日本人が持たねばならぬとした。だからこそ、この頃の日本人の横暴さに憤慨したのである。事実、バリ人を乱暴に扱った事件を、三浦は数多く日記に書き留めている。²⁰¹⁾ その中には、バリ島の陸軍慰安所に拘引された女性を、自分の力で返してやったりしたこともあった。

19年に入ると、東条声明を受けてインドネシアに政治参与が認められ、郷土防衛義勇軍 **Soekarela Tentara Pembela Tanah Air**（略して **PETA** ペタ）が設立されることになった。三浦はバリ島を巡回して演説し、「バリ人（バリ島の意か、筆者注）はバリ人の手で護らねばならぬ。このため若い青年達は1人残らず防衛戦士となることだ。」²⁰²⁾として募集を応援した。²⁰³⁾

三浦の体調は、この頃からますます衰弱し、常時、発熱発汗、耳鳴り、胃部の痛みを訴える

199) Propinsi Sunda Ketjil, *REPUBLIK INDONESIA – Sunda Ketjil*. 1953 (?), pp. 29-30. オランダのバリ侵略は19世紀を通じて何回もおこなわれ、その都度バリ島にはオランダ人の勢力が浸透していった。1907年のバリ攻略はその最終的な侵略であり、これによりバリ王家は崩壊することになった。

200) 国崎（元内務長）「インドネシアの父三浦襄翁」『Bali』第3号, p.27.

201) 三浦襄『日記』昭和18年9月27日。および戸川幸夫「バリ島の碑」『昭和快人録』p. 247以下を参照のこと。戸川は読売新聞の従軍記者としてバリ島に赴き、三浦の世話になった。この「バリ島の碑」には、その当時の情景がよく語られている。

202) 国崎「前掲論文」p.25.

203) 土屋競「バリ義勇軍 **BALI PETA**」(早大社研所蔵手書き原稿)

ようになり、コーヒーの飲用をやめ、ハブ茶に変えたりしていた。²⁰⁴⁾

遂に5月、病院船が出るのを機に、彼は帰国を決意した。日記には、「5月7日（日曜日）畜産会、三浦商会、畜各支部長^マ33名会合、病気の為め帰国すべきを語り、イパンデ、スワルデ兩人一般民に対スル態度不尊不心切ナルを叱責、畜産会ノ目テキ、一（イツ、著者注）ニ軍ニ協力シテ、畜産の^マ葉荷其の他を迅速円滑ナラシメ、島民の為、利福興進を計ル事等を説き彼レ等の覚醒をうながす。……（後略）」こうして三浦はバリ島を離れ、約1カ月後の6月4日佐世保に上陸した。小倉の妹と奈良の兄の家を訪問し、仙台に帰着したのは12日であった。

彼は、仙台に帰っても、バリ島にいる日本人の実家を訪問したり、子供達を連れて小旅行をしたり、あまり腰を落ちつけて静養はしなかった。東京の軍令部南方政務部に行つて将来のバリ畜産会、三浦商会について要請したり、²⁰⁵⁾ 関係する製罐製造機械とか、歯ブラシの植毛機械等の折衝のため、呉や京都に行つたりの生活であった。家にいる時は、趣味である切手の整理をしたり、三女久子、四女栄子を連れて散歩をしたり、畑いじりをした。

やがて彼は、再びバリ島に帰ることを決意した。その理由について、飛行機の塔乗券がとれた11月2日の日記に次のように書かれている。「（前略）……南方政務部より速達来る。飛行機は20日後の由、やっと安心する。余り通知がないので色々考えさせられた。小関、渡名喜両大佐に出した少々強過ぎたあの手紙の結果でないかと考えていたが、ソー²⁰⁶⁾ でもなかったらしい。死線を越えて原住民と約束した帰国を断然履行せねば日本人の信用に関する。男子の一言戦局が如何に吾れ非ざりと雖も、死が行手に待ちかまえていても使命は断じて果さねばならぬのだ。……（後略）」

10月24日のレイテ沖海戦で、日本が連合艦隊の主力を失い、制空権を失った直後である。バリ島に帰るだけでも、文字通り決死行であったが、12月19日に無事バリ島にもどった。

三浦が日本にいる19年9月7日に、小磯声明が出された。それは、時期にはふれていないものの、インドネシア地域の独立を許容するものであった。戦局の圧倒的劣勢の中で、スカルノらインドネシア民族主義者の協力を得るためのものであった。

このような動きを受けて、三浦は、先にインドネシアに政治参与の道が開かれて招集された19年5月の、第1回小スンダ州会²⁰⁷⁾の時の懸案であったバリ島内の宗教問題の解決に着手した。

204) 三浦襄『日記』昭和18年12月27日。「二、三日来朝氣持チガ悪イ、昔スラバヤデ胃ノ^マ当リガ痛、ンダアノ十二指腸潰瘍ヲ患ッタ時ト同ジ様ナ気分デアル。此ノ日ヨリ、コーヒーヲヤメ、ハブ草トシ仰油ヲ毎食々スル事ニス。」

205) 三浦襄『日記』昭和19年7月21日。

206) この件は畜産会、三浦商会の事業に関するものであろうことは推察しうる。しかしその内容は判断できない。ただ、当時三浦は戦争終結後もバリ島で事業を継続することを希望し、事業家としてその業務の権益を保護し、拡大することを願っていたようである。

207) カナヘレ『インドネシア独立』p.183

それは、従来、各州ごとに存在する僧侶の、日本軍政と大東亜共栄圏構想に対する意識の激しい格差と、宗教的祭儀の非文明的な面を改善しようとするものであった。バリ島では、アベン Aben（闘鶏）が盛んであり、バンタン Bantan（いけにえ）を捧げる慣習があった。²⁰⁸⁾ 三浦は、パンディタダルマ Pandita Dharma（宗教連盟）を作った。²⁰⁹⁾ その結果、若い僧侶階級にとって大きな刺激となり、パルマン・ペランダ・バリ Parman Peland Bali（バリ敬神同盟）を結成するに至った。²¹⁰⁾ このような、バリ島の宗教、慣習に対して、従来、民政部も手を着けることができなかったそれを、三浦がはじめて着手し、バリ島内を演説して回った。

20年に入って、インドネシアが独立に向かって大きく動きはじめた時に、バリ島では6月22日から24日まで、第3回小スンダ州会が開かれた。そしてこの州会にスカルノが出席して演説し、人民大衆に大きな感銘を与えた。²¹¹⁾ 三浦もこの州会を傍聴した。²¹²⁾

バリ島に小スンダ建国同志会が設立されたのは8月21日のことである。²¹³⁾ この小スンダ建国同志会に、唯一の日本人として、²¹⁴⁾ また本部次長として三浦が推された。²¹⁵⁾ 三浦はそれを快く受け、バリ畜産会、三浦商会の仕事の全権をバリ人に移管し、養育していた子供達は、相当の養育費をつけて母親の許へ送り返し、いっさいの身辺整理をして、デンパッサルからシンガラジャに出てきた。²¹⁶⁾ それは、敗戦のわずか1日前の8月14日のことであった。

Ⅲ-3. 日本の敗戦後の活動——自決

日本の敗戦の知らせは、三浦にとって大きな衝撃であった。念願であったインドネシアの独立が決定し、個人としても一定の役割をはたそうとし、まさにその仕事に着手しようとした時に知ったのである。文字通り青天の霹靂であった。国崎内務長は、その時のことを次のように述べている。「三浦翁は、当時相変わらず宗教運動で島内を廻ってられ、終戦を知らなかった。たしか終戦3日目にデンパッサルに帰られたとき、私は大東亜戦争の終結を伝えると、張りつめた気持ちも一度に緩んでか、頭をガクリと下げ、前のめりにのめるようにして一言も発

208) 越野菊雄「三浦氏を懐う」『Bali』第3号, p.9.

209) プジャ「前掲論文」p.38.

210) 越野菊雄「三浦氏を懐う」『Bali』第3号, p.9.

211) カナヘレ『インドネシア独立』p.315.

212) 越野菊雄「三浦氏を懐う」『Bali』第3号, p.9.

213) インドネシア語で Soember Darah Rakjat Indonesia oentoek Pembangunan Negara Saudara（文字通り直訳すれば、同胞の国の設立をめざすインドネシア人民の血盟の意）。議長に、日本側はブレレンのラジャを任命したが、他の役員には、バリの保守的貴族がなり、封建指導者が民族主義組織を指導するという皮肉な状態になった。カナヘレ『インドネシア独立』p.320.

214) バリ島以外にセレベス、ボルネオにも建国同志会が作られたが中央機関は設けられなかった。セレベスでは、インドネシアを真に理解しない自称インドネシア通を機構内に送り込んだ結果、後の独立闘争の力にはならなかった。岸『軍政の研究』p.423.

215) 越野菊雄「三浦氏を懐う」『Bali』第3号, p.9.

216) 越野菊雄「バリ島に眠る三浦襄翁—インドネシア独立の蔭に」『月刊インドネシア』第118号, p.9.

せられなかった。」²¹⁷⁾ と。また翌日会った時、「原住民に嘘をいった。腹を切らねばならぬ。」とたった一言言ったという。

三浦は、その衝撃を受けて数日姿を隠した。²¹⁸⁾ そのうち彼は、藤岡保夫をつれてバリ全島を猛烈な勢いで回りはじめた。その時には、心境に変化を来たしたのではないかと思われるほど朗らかになっていた。²¹⁹⁾ 三浦はこの旅行を、「バリ人にお分れの挨拶」²²⁰⁾ をしに行くものとしていた。随行した藤岡によれば、この時の三浦の講演は、徹頭徹尾謝罪の言葉であり、またバリ人の将来に対する激励であった。彼は、戦争に対するバリ人の協力、日本のバリ人に与えた苦難を、ひとことひとこと血を吐くように語った。涙を流しながら聞く者も少なくなかったという。²²¹⁾

同時に彼は、周囲の者に自決する旨を告げはじめ、墓を作る材料の調達を開始した。²²²⁾ 周囲の者はこぞって反対した。一部には、彼は精神に異常をきたしたとさえ言う者もいた。²²³⁾

一方、ジャワでは、日本の敗戦をめぐって激しい混乱が生じた。急進的民族主義者青年達はスカルノとハッタ Mohammad Hatta を拉致し、連合軍が上陸してくる以前に独立を宣言させようとした。それは、日本の敗戦によって、インドネシアの独立が不可能になるかもしれないという危機があったからである。そして8月17日に、スカルノの名でインドネシアは独立宣言を発した。²²⁴⁾

終戦直後の混乱の中で、通信網は寸断されていたであろうし、どれほど正確なニュースを三浦が入手していたのかは不明であるが、彼は独立宣言の発布の事実を知っていたと考えるのが妥当であろう。

藤岡によれば、その当時の三浦の自決の理由は次の三つであった。

- (一) 戦争中、「日本人というものは、戦争に敗けたら腹を切るものである。日本の武士道とは斯の如きものである」と原住民に説いていたが、扱て戦争が済んで見たら誰も自決する者がいない。そうすると日本人は嘘つきだと云うことになり、今後日本を信頼する民族がなくなる。それで自分は在バリ日本人を代表する。
- (二) 自分は戦時中、陰に陽にインドネシアの独立のために努力してきたが、今後はそれが不可能であるので、魂魄此の地に止り、彼らを激励したい。

217) 国崎「前掲論文」p.27.

218) 越野菊雄「三浦氏を懐う」p.9.

219) 国崎「前掲論文」p.27.

220) 藤岡保夫「三浦さん!!」『Bali』第3号, p.16.

221) 「同上論文」p.16.

222) インドネシア人に自決の場所を作らせ棺を作らせた。また国崎大尉にはセメントを要求し、ピストルの撃ち方を習った。

223) 藤岡保夫「前掲論文」p.19.

224) 岸『軍政の研究』p.424. 西嶋重忠『前掲書』pp. 196-221に独立宣言前夜の事実経過が詳しい。

(三) 戦時中及び特に戦後の日本人達の行動は全く話にならない。自分の自決が彼らに反省の機会を与えるなら幸いである。

という3点であった。²²⁵⁾

三浦は、9月6日の夕方、デンパッサルの映画館で最後の講演をした。聴衆は現地人および華僑ら約6百人であった。²²⁶⁾ この時の講演は悲壮なものであったらしい。その後、バリホテルで訣別宴が開かれた。出席者は、バリ人4,5名、日本人数名であった。²²⁷⁾ 宴のあと、プジャと稗方と3人で夜半1時頃まで語り合った。²²⁸⁾ その時まで周囲の人間は、三浦の自決を思い留まらせようとしていた。プジャの、なにゆえ自決するかとの問いに答えて、三浦は「私が生き方を知らないために死ぬのではない。私は、日本精神をバリに生かすために犠牲になるのだ(傍点筆者)。」²²⁹⁾ と述べた。

この自決を思い留まらせるべく多くの人が三浦と話し合った。その時の三浦の言葉を次に列挙する。

敗戦とインドネシアの独立、すなわちその後の連合軍の上陸について「もう皆んな後戻りしてはいかんぞ。前進することだけだ！前進だ！」と2,3度繰り返した。(プジャに対して)

「自分の死は、子供達すなわちバリの住民や土地が永久に安泰であるための1つの道である。肉体的に、私は子供達とおつき合いできなくなるが、私の魂は子供達バリ人を末永く見守るであろう。」(イ・グスティ・クトット・カトン—I Goesti Ketoet Katon に対して)

連合軍が上陸して来たら、「した手に出なさい。あわてて行動することはない。どんな命令にも従う。しかし精神は決して卑下することはない。あくまで独立の理想に邁進せよ。…(中略)……私の子、スランガン。今日は私の最後の面会だ。われら理想が達成されることを祈る。日本がなくとも、丁度植物がその地上部を失っても根は残り幾年か後もし雨が降れば再び繁茂、成長するのだ(傍点筆者)。」(イ・プト・スランガンに対して)

インドネシアの独立宣言の事実を知っていたであろうと考えられる三浦は、今後予想される独立戦争の困難さや、日本の手でインドネシアを独立させることができなかった日本の非力さを思い、また、歴史の転回にあたって、自らがインドネシアに何をもって寄与しうるかという問題で苦悩し、その結果、自決こそが自分の今後の道であるとしたのではないだろうか。すなわち、自らの年齢と肉体的限界を思い、そしてそれ以上に、インドネシアの「子供達」がイ

225) 藤岡保夫「前掲論文」p.19.

226) 越野菊雄「三浦氏を懐う」p.10.

227) 国崎「前掲論文」p.28.

228) プジャ「前掲論文」p.38.

229) 「同上論文」p.38.

インドネシアの独立に向かって「大人」になってゆく姿、つまり三浦自身の能力と理解を越えたところに進もうとしているのを見て、自らの生き方を決断したのではないだろうか。

三浦は、稗方から記念に軍刀をもらい、2人を送り出したあと、入浴し、²³⁰⁾ 遺書を書いた。家族にあてた遺書には、自らの自決を「原住民の覚醒を促進せしむるに大なる効果あるものたる事を信じて疑はぬ。12月19日帰島以来2百余回の講演をし、宗教改革運動もやった。3年有半のバリ島の滞在は、実に意義深いものである。」²³¹⁾ と書いた。

そして9月7日午前6時、右こめかみにピストルを撃ち込んで自決した。居室の机の上には、角封筒入のバリ人への邦文およびインドネシア語文の遺書と仙台の家族にあてた遺書、藤岡への形見の時計、世話をした子供たちへの形見（紙幣、銀貨）等が置かれていた。²³²⁾

IV 三浦襄の「キリスト教」受容

—結語にかえて—

三浦は牧師の息子であったが、「南進」以降、いわゆる忠実な教会員ではありえず、具体的な「教会」と接触しなかったことはすでにのべた。三浦のような事例は、日本の教会においては、いわゆるクリスチャンと呼ばない感覚がある。それは、この異教社会である日本において、「教会」を信仰形成の場として規定する傾向が強いからである。しかし、われわれの課題である信徒における「キリスト教」の受容は、すでにのべたように、倫理として社会化した事柄の真の契機が「キリスト教」とどのような位相で関わっているかを考察することである。

三浦は、幼年期から青年期にかけては、牧師である父や母の生き方、価値観に疑いを持たなかった。そのような意味で、深刻に自らの思想を求め、苦悩する内向的な性格ではなかった。茶目で剽きんな性格に加えて冒険心を持っていた。そのような天真爛漫な三浦の性格は、堤林との訣別にも見ることができる。そして、キリスト教の受容のタイプの相違が明確になるのも堤林との訣別である。

三浦らの南洋商会の脱退にいたる現象面よりも、その原因を探りつつ、三浦と堤林の「キリスト教」受容を比較してみると、堤林の信仰は極度に観念化し、抽象化し、自らの行動の結節点を「キリスト教」に求め、常に神を意識するものであった。結局、堤林が「キリスト教」から離れてゆくのも、自らの決断と行動の原理としての「キリスト教」が、彼にとってリアリティを持たなくなったからにはかならない。堤林にとって、まず先行するのが自らの行動の意味づけであり、その意味で、広義の求道者といえる。

230) ムルダ Injoman Moerda「三浦さんに対する印象」『Bali』第3号, p.44.

231) 三浦襄「三浦さんの遺書寫」『Bali』第3号, p.2.

232) 越野菊雄「三浦氏を懷う」『Bali』第3号, p.11.

しかし、三浦にとってはそのような堤林の煩悶はほとんど問題にならなかった。三浦の場合は思考し行動する内容自体に、無意識のうちに自明の事柄として「キリスト教」と結合していたのであり、信仰と生活に厳格さを求め、その厳格さで自らを律しようとするのではなかった。

南洋に渡った日本人は、「トコ・ジュパン」を含め、日本にいる日本人よりもより強烈に「日本」を意識した。彼らは、一人ひとりが「日本」を代表しているという自覚を持つのが一般的であった。彼らは、自らの商売の動向をも含めて、日本と諸外国の国際関係に敏感にならざるをえなかった。また、その「日本」は脱亜入欧を目指して進んでいた。そしてまた彼らの「南進」は、日本の国家権益の保護、獲得、拡大という、いわゆる帝国主義の政策を、自覚的に追い求めた結果ではなかった。彼らは「日本」という存在に自らの拠り所を求め、自らが「日本人」であることを自覚化し、後ろ指をさされることなく、よき「日本人」であろうとした。

三浦にとっても、この「日本人」意識は明確であった。「トコ・スペダのトアン・ジュパン」として信頼されることによって明らかなように、結果として日本の帝国主義化の南方における先兵の一人となったが、彼の中では、そのような帝国主義的国家観は持ちえなかった。その意味で三浦は、いわゆる「大アジア主義者」²³³⁾ではなかった。すなわち、生態としては、南方在住の平均的日本人といえる。それゆえに、三浦においては、「日本人」であることと「キリスト信徒」であることは、対立的にあるいは媒介的に捉える契機を持たなかった。三浦において、両者は何の矛盾もなく受容されていた。

このような三浦が、太平洋戦争中、軍属として出征以来、バリ島における「政治」にコミットしはじめた。それまでバリ島に在住し、黙々と商売に精を出していた、いわば一市民三浦が公的な場で、バリ島の行政に参画しはじめたのである。

三浦にとって、太平洋戦争中のバリ島軍政にはたした活動と役割を、彼の「キリスト教」受容の社会化として考察するとどのようなになるだろうか。

三浦にとって太平洋戦争への参加は、海軍による召集というものであるにもかかわらず、バリ島での活動は積極的であった。日本のインドネシア地域の占領は、すでにのべたように、原料資源の永久確保を目標としたものであったが、現実には叫ばれたのは、アジア民族の解放であった。そして三浦は、バリ島をよく知り、バリ人をよく知り、真にバリ人を理解できる日本人は自分だけであり、真のバリ人のために働けるという、気負いと満足感と自覚を持っていた。

三浦はバリ島の軍政に参画することによって、戦争遂行に関して何ほどの理念を必要と

233) 大アジア主義を簡単に叙述し、その概念を規定するのは困難である。ここでは、そのような細かい厳密な意味ではなく、アジアを自らの経済圏として設定してゆこうとする思想という意味で用いている。「大アジア主義」に関する論述は、竹内好『日本とアジア』筑摩書房、1966年を参照のこと。

し、説得力のある論理が必要となった。そこで三浦は、軍部の掲げるいわば建て前の論理、すなわち、アジア民族の解放という理念について考えなければならなかったのではないだろうか。したがって、三浦にとってアジア民族の解放とは、自らの内で育成してきた思想ではなく、彼のバリ島軍政における活動の論理、目的として理念化して使用された概念ではなかったか。それゆえ三浦にとって、おそらくはじめて、彼の「キリスト教」やインドネシア、バリ島、「日本」あるいは「戦争」との関係を整理し、系統だてる契機を持ったのではないだろうか。

このような経過を経て形成された三浦のアジア民族の解放という理念の内実、すでにのべたように、「よき兄としての日本人」であり、バリ島における慣習風俗の「日本化」を強制するのではなく、バリ畜産会に見られるように、民族自立に向けた具体性を伴った訓練であった。

それらの活動は、三浦にとっては使命観に基づくものであった。その使命とは、前述したように、日本人に対して、日本人がバリ人のよき手本として、正直、勤勉、公平でなければならないという要求と、バリ人に対して、インドネシアの独立のために、戦争に協力させられる“今の時の苦しみ”に耐えるように、という要求になってあらわれた。三浦は、そこで自覚的にキリスト教を意識しているのではない。自覚的なのは、むしろ「日本人として」という意識である。

このように、三浦の活動の動機づけは、「日本人として」という傾向のほうがはるかに強い。われわれは、三浦の「キリスト教」との関わりを考察する際に、はたして本当に「キリスト教」との関わりがあるのかを疑問に思わざるをえない面がある。そこでわれわれが注目しなければならないのは、三浦にとっての「日本人」という意識の中に、すでに「キリスト教」が内在しているという点である。その場合の「キリスト教」とは、第I章で述べた「聖なる教会」である。そして、「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」との位相が、決して対峙的、あるいは相互排他的な関係ではなく、三浦にとって、いわば“空気のようなもの”として自明の事柄として内側に存在していたのである。そうであるが故に、他の多くの「日本人」とは異なる側面を見出すことができるのである。

それが最もよく結実しているのが、敗戦後の三浦の行動と、それに続く自決である。敗戦直後の南洋の日本人の行動に関する後藤乾一の分析によれば、²³⁴⁾ 敗戦国の国民がたどる“オーソドックス”な論理にしたがって、時代に順応した「帰順型」(I)と、近代日本の論理から離脱してゆく「離脱型」(II)があり、その「離脱型」を細かく見ると、(1)自らの生命を自らの手で絶った者と、(2)インドネシア社会の中に自らの将来を見出し、その社会との一体感を求め

234) 後藤乾一「日本人のインドネシア観」『社会科学討究』第20巻2, 3号および同『火の海の墓標—ある<アジア主義者>の流転と帰結』pp. 182-183.

て行動した者とがある。さらに(1)の場合、(イ)神州不滅の皇国日本帝国が敗れたことについての自責の念から天皇に死をもって不忠の罪をわびる場合と、(ロ)インドネシア民族に「共生同死」を求め、「聖戦」完遂の暁には独立を与えると約束しながら、それを果たさず日本が敗れたことについて、インドネシア民族に相済まぬとって自決した場合とがある。(2)の場合(イ)動機は各個に異なっても、インドネシア民衆の一員として、インドネシアに骨を埋めようとした場合と、(ロ)たとえ日本軍がインドネシア民族に対する独立付与の約束を反古にしたとしても、日本人として、インドネシア独立軍に参加し、インドネシア民族と共に、文字通り「共生同死」の道をたどる場合とがある。そして三浦を、(Ⅱ), (1), (ロ)に分類した。これは的確な指摘といえよう。しかし、自決の要因を、「共生同死」という一点に絞ることは適当ではあるまい。

前述したように、三浦の家族にあてた遺書には、「3年有半の御奉公の最后を全うすべく遂にバリ島の土となる事を決意し」て、その自決が「原住民の覚醒を促進せしむるに大なる効果あるものたる事を信じて疑は」なかったと書かれている。そして、三浦の講演の多くは謝罪の言葉であり、その意味で、三浦なりの戦争責任論ともいえる。また、日本人の行動への反省の契機にしたいという願いもあった。そしてそれ以上に、インドネシアが独立するに足る民族的自覚と能力を獲得してほしいということであった。

三浦は、だれにも知れずに自決したのではなく、自らの自決を予告し、公言し、いわば衆目の中で自決した。それは、彼が自らの自決の意義を広く知ってほしいという願いを持っていたことにほかならない。彼はその「効果を信じて疑は」なかったのである。三浦にとって自らの自決は、前述したように、「一粒の麦が地に落ちて死んだなら、豊かに実を結ぶ」という意味を持っていた。しかしわれわれは、三浦が聖書的言質を与えたがゆえに、三浦における「キリスト教」が明確に存在すると考えるわけにはゆかない。

三浦は、自分が牧師の息子だからかくあらねばならないということを家族にほとんど語っていないし、²³⁵⁾ 戦争中に自らがクリスチャンであると言明した痕跡もない。周囲の人間でも、三浦がクリスチャンであると知っていた者もいたが、戦後になるまで知らぬ者もいた。すなわち三浦にとって名目的な意味でのクリスチャンであるかどうかはほとんど意味を持たなかったのである。三浦はその意味で、いわゆる「キリスト教臭さ」を持ってはいない。したがって、三浦における「キリスト教」受容は、決断して受容するという、厳しい対決型のものではなく、彼にとって自明の事柄であり、そこでは、宗教というよりも、自らの生活意識として存在し、価値の最深部に根づき、その上に自らの価値を形成するものであった。それ故、三浦にとって

235) 逆に、自分が牧師の息子だから何か特別な倫理を持っているのではないか、という意味の質問をよく受けたという。三浦しげとのインタビュー。1976年8月21日、仙台。

は、いわゆる神学的思考は、自覚的に探究し、獲得されたものではないといえるであろう。

三浦の信仰の特徴をいくつかあげることができる。第1に、それは自己拡大的なことではなく、またそのために他の文化や宗教を征服しようとするのではなく、それらとの共存が可能であると考えるところにあった。第2に、「日本」と「天皇制」を分離して考えることはなかった。したがって「日本」と「キリスト教」、すなわち天皇制国体とキリスト教信仰について、対決的要素をそこに見出すことはなかった。第3に、その神観は正義の神という認識を持っていた。その正義を自らが実行することにおいて、クリスチャンであるという認識を持っていた。第4に、正義の神の展開として、自らの行為を奉仕として意味づけ、使命観で行動するようになる。したがって、三浦から、贖罪信仰を見出すことはできない。

これまで、キリスト教に基づく価値観の中で育ち、いわゆる教会生活を通して教会形成に加わることのなかった一人の日本人キリスト者について考察してきた。この考察を通して、キリスト教信仰が、三浦襄という一人の人間の精神領域から遊離したものではなく、歴史的にはさまざまな限界を持ちつつも、三浦の場合には彼の生の根底を形成していたといえるであろう。

これまでわれわれは、キリスト教を定義し、その定義した概念から現実を照射するのではなく、あるがままの現実、すなわち実態から出発して、そのうちに潜む行動を支える原理が何であるのかを探ろうとした。前述した信仰の実態的分析に従えば、三浦は、明らかにキリスト教的価値によって育まれ(Ⅱ)、入信以来、一貫してそのキリスト教による価値観を疑うことはなく(1)、教会のアクティブメンバーにはならなかったが、自らの価値観がキリスト教に拠っていた(b)のである。

このように明治中期から太平洋戦争に至る日本近代史の中で、一人の人間が生きたという事実を、前述のような実態的分析に従って、ケーススタディを試みてきた。この方法は、一言で言えば、実態的分析を通して、個の内に存在する「聖なる教会」と「歴史的社会的教会」の位相を問い、さらにその個が歴史的社会的存在であることをふまえて、個における「聖なる教会」、すなわち個の生の根底を支える真理契機が、いかに関わったかを問うことである。武田によって開始された「土着化」をめぐる個人研究は、さらに徹底して、いわゆる普通の一般の信徒、教会員にまで押し進め、その中で、「日本」ないし「日本人」が、どのようにキリスト教を受容したのか、その問題を明らかにすることは、今後の課題として、さらに追究されなければならないであろう。

表 1 三浦襄履歴書写し

(厚生省第二南遣嘱託履歴収録)

本 籍 地	仙台市三番丁100番地	三 浦 襄
現 住 所	同市新坂通170番地	明治20年 8 月10日生
家 族 名	三 浦 シ ゲ 明29. 10. 23生	長男 俊雄 次女 道子 三女 久子 四女 栄子
明治41年11月	明治学院中途退学	
同年12月	南洋商会入会	
42年 5月	蘭印、爪哇「スマラン」ニ渡航	
42年12月	南洋商会退会、爪哇各地「バリ」「ロンボク」「スンバワ」各島遍歴	
大正元年12月	セレベス、マカッサルニ渡航、雑貨店開設	
4 年	日印貿易商会開設	
14年	同会解散	
昭和 2 年	セレベス、トラ ^マ ンジャに ^マ コーヒー園経営	
5 年11月	「バリ島」ニ渡航、自動車タイヤ再製、自転車業開業	
16年 7 月	帰国	
17年 1 月30日	「ダバオ」ニ向ケ東京発（飛行機便17. 2. 8ダバオ着）	
2 月 8 日	第三艦隊ニ於ケル業務ヲ嘱託ス、海軍省年額千八百円を給シ、部内限奏任官待遇トス	
同日	「ダバオ」発、新興丸便乗（2. 10「ヒロ」着）	
2 月12日	「ヒロ」発（陸軍金村部隊ト共ニ、笹子丸便乗） 2. 14マカッサル着	
16日	マカッサー ^マ 発	
2 月18日	同部隊ト共ニ「バリ島」敵前上陸	
3 月10日	第二南遣艦隊ニ改編	
7 月 1 日	横須賀鎮守府第一特別陸戦隊司令ノ命ヲ承ク服務スベシ（第二南遣艦隊）	
18年 4 月 1 日	自今報酬年額貳千十円を給ス（海軍省）	

表2 三浦襄関係年表

年号	年齢	三 浦 襄	関 係 事 項 (家族, 教会, インドネシア, 戦争等)
明21		8. 10. 東京・神田に宗三郎, 恵子の第2子, 次男として生まれる。当時宗三郎は下谷教会で植村を応援, 恵子はこの年英語訓導となる。	
		(相馬, 仙台, 米沢, 岩沼の各地の日本基督教会) (宮城中会の教会を転々とする父について転居)	
33	11	5. 父, 秋田教会牧師となり, 一家は秋田に転居する。	
		(通常の学年を眼病のため一年遅れて秋田中学に)入学	
38	16	3. 父より受洗 11. 明治学院普通部に編入学, 学院では競漕部に入る	(日露戦争) 教会では戦時大挙伝道 11. 宗三郎, 単身でハワイ日本人教会に赴任。一家は東京へ。
41	19	11. 明治学院中退	
42	20	(1. ~2.) 南洋商会加入 2. 東海道を実験的行商 3. 8. 秋田教会から高輪教会に転会 4. 14. 神奈川丸で横浜を出帆 5. 13. ジャワ島スマラン着。翌日から行商開始。 12. 南洋商会脱会	41. 12. ~42. 1. 堤林数衛, 南洋商会を設立 2. ジャカルタに日本領事館開設
		(南洋商会を脱会した後, バリ, ロンボック島等)を視察	
大 1	23	12. セレベス島マカッサルで雑貨小売業開業	
4	26	2. 鶴間と共同で, 「日印貿易商会」設立	この頃から「南洋熱」盛んになり, 財閥系商社の進出が著しくなる
5	27	日本で宗三郎の司式にて目沢民子と結婚	
6	28		4. 長男俊雄生まれる
10	32	(この頃, マカッサル日本人会理事になり事業も)安定	2. 長女裕子生まれる
13	35		9. 次女道子生まれる
14	36	鶴間の死亡により, 「日印貿易商会」解散	
15	37	10. 10. 妻民子, 過労のため千葉で死亡	
昭 2	38	岸と共同でセレベス島トラジャにコーヒー園開設	
3	39	3. 横山しげと結婚	
5	41	11. コーヒー園経営に失敗し, 家財道具いっさいを捨ててバリ島に移り, 自転車修理業を始める。三浦商店である。	(大恐慌)
6	42		9. 三女久子生まれる

原：日本人キリスト者三浦襄の「南方関与」

8	44		10. 四女栄子生まれる。以来子女の教育のため、家族は仙台に住む。
		(誠実な商売で住民から信頼され支店もできて地歩を固める)	
16	52	6. 帰国	
17	53	1. 25 召集，海軍軍属奏任官待遇，年給1800円（大尉待遇） 2. 19. 陸軍バリ上陸部隊と共に，バリ島上陸 5. 海軍第21根拠地隊司令部付きとなる。 「バリの父」と呼ばれる。 8. 民政部顧問となる	2. 日本軍，バリ島占領後間接統治を決定 5. 陸軍と海軍が交替，軍政を施行 8. 海軍地域の行政機構の改編により，セラム民政部がバリ島を掌握
18	54	1. 司令官顧問となり，(1)インドネシア人登用政策，(2)首長の監督，(3)道路税自動車税の撤廃をすすめる 6. 1. 無給嘱託となり，畜産関係の給与のみとなる 9. バリ畜産会を設立 10. 三浦商会を設立（胃病進行する）	1. バリ島にセラム民政部移転，ビルマ，フィリピン独立決定 12. インドネシアの政治参与を許可
19	55	(病勢悪化) 5. 7. 病院船にて帰国 6. 14. 仙台帰着 (東京，京都，呉を旅行，軍令部と各地工場にて，畜産会と三浦商会のための折衝と，工作機の視察，研究をする) 12. 19. バリ島帰着	2. バリ義勇軍PETA創立 2. 小スンダ民政部設立 4. 小スンダ暫定州会設立 5. 第1回小スンダ州会 9. 7. インドネシア地域の独立許可（小磯声明）
20	56	4. 三浦，宗教連盟を設立。宗教覚醒運動を推進する 8. 9. 畜産会，三浦商会を整理する 8. 11. 「小スンダ建国同志会」本部次長に就任する (敗戦後姿をかくす。その後，全島をまわってバリ島に謝罪の演説。同時に自決の準備を開始。) 9. 6. デンパッサルの映画館で最後の演説をする 9. 7. 未明，ピストルによって自決する	5. 28. ジャワで独立準備調査会が開かれ，この会議で，スカルノのパンチャ・シラ（建国五原則）を採択 6. ジャワで「建国同志会」設立 7. 17. インドネシアの独立を9月7日と決定 8. 15. 敗戦 8. 17. インドネシアの独立宣言